
蒼天のリステリカ

コーヨ ケイコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼天のリステリカ

【Nコード】

N1055R

【作者名】

コーヨ ケイコ

【あらすじ】

「貴方を迎えにきた」学校に金髪の少女が突然あらわれて隼人を連れ去った。夜空のゲートをくぐり抜けて辿りついたところは地図にない国。そしてここで隼人を待ち受けていたのは、ユニコーンが空を舞う幻想的な風景とは裏腹に、強制的に押し付けられた宿主としての運命だった。「俺は絶対に日本に帰る！」

一角獣に乗った少女

柔らかな月光に照らされて春の雲海が広がっていた。満月は天高く妖しいまでの姿を惜しげもなく晒している。眠たげに広がるその雲の切れ目から、不意に小さな渦が巻き起こった。またたく間に周囲を巻き込みその半径を広げると、その雲の渦の中心部から一頭の獣が飛び出してきた。

水面から跳ねる魚のように、垂直に夜空を駆け上がったかと思うと、空を力強く蹴り上げ体の向きを変える。

月の光に照らされ白銀に輝く体軀は見事な駿馬。額には植物の蔦のように捻れ、先端が鋭く尖った角がついている。よく見るとその一角獣の背には外套をなびかせた小柄な人物が鞍に張り付くように跨がっていた。短く持った手綱を軽く繰ると、獣は雲海の上をゆったりと旋回を始める。

「時間がないわ……」

一角獣をあやつる外套の少女が地上に瞬く街の灯りを覗き込みながら舌打ちをした。ついで満月を雲海を見比べる。雲の渦はすっかり消失し、また元の惰眠をむさぼるような滑らかさを取り戻している。

少女が背に手を回してその荷を確かめる。小さな背中に背負われたのは弓と矢筒。腰には鞘に納められた長剣。なめした革に包まれた様子から相当使い込まれた物なのだろう。彼女の手も同じく使い込まれた褐色の革の手袋がはめられていた。

緩やかな早足をしていた馬の腹を少女が蹴り上げる。主人の意を悟った一角獣は一声いなくなくと下界の灯りを目指して暗闇の中を踊るように駆け降りていった。

「日下部。お前はやれば出来るんだから、進学真面目に考えろよ」
日下部隼人はつい先刻担任教師から言われた言葉を考えていた。

野球部の忘れ物である白球を弄びながらグラウンドを突っ切って家路に帰る途中だ。夜風に舞う優雅な桜の花弁とは裏腹に、高校三年の春は死ぬほど憂鬱な現実が隼人を待ち構えていた。

進路希望書を適当に提出したのが不味かった、と隼人は苦笑いをする。こんな遅くまで懇々と諭されるなんて、今度の担任はよほど暇だと見える。勉強が嫌いなものではなかった。しかし無目的に進学も就職も選べない、そんなこたわりを感じているに過ぎない。

周囲に、状況に流されて自分の身の振り方を決めてきた。正直、優等生キアラだとも思う。大きなこともしてこなかったかわりに、人並みから外れたこともないはずだ。

（俺って、すげーつまらない奴）

そんな自分に自分が一番飽きている。この時期になってのどことないこの鬱屈した感情は、その十人並みの人生の小さな瘤のような物かもしれない。

隼人はグラウンドの中央までくるとおもむろに漆黒の空をあおいだ。夜風に舞い上がった薄紅色の花びらが視界をいくつも通り過ぎる。ほの白い花卉にまぎれて、隼人の視線の先にそれは現れた。

満月の光の欠片のように、銀色に閃き、やがてその姿を近づけてくる。

「なんなんだ？鳥か？」

いや。鳥にしては大きい。そして早い。空の彼方からまっすぐにこちらを目指して降りてくるのだ。隼人が目を凝らして一歩近づいたときだった。

『これだから異界の殿方は可愛らしい』

刺すような冷気が右の耳朵にふれ、冷たい妖艶な声がすぐ近くで響いた。

「な、なんなんだよ！？」

あまりのことに隼人が振り返って飛び退く。しかしその二の腕にしっかりと食い込む物がある。女の指だ。

隼人はその光景に目を疑った。月明かりで出来た隼人の影から女

の上半身がずりりと這い出し、隼人の肘に白い腕を絡み付かせている。頬を擦り寄せるようにして隼人の腕をにじり登る。よろよろと這い出た腰から下は蜥蜴のような四肢。しかしそれは確かに血管の透き通った柔らかな皮膚をもっていた。

「なんなんだよ！止めるよ、何だよこれ！！」

あまりのことに隼人は腕が抜けんばかりに振り回し異形の女を引き離す。そのとき目の前を白い影が横切った。

異形の女の絶叫とともに隼人の腕の拘束が緩む。途端、目の前の女の腕から鮮血がほとばしった。女は切り落とされた腕を恨めしげに眺め、次に白い影から飛び出た外套の人物を鬼の形相で睨みつけた。

「グラスレイルの姫様は礼儀も知らんのかえ。獲物を横取りするとはよほど男に飢えていると見える」

「黙れ」

血の滴る長剣を無造作に掴んだまま外套の人物は隼人に向かって降り向く。小さな作りの顔と目が合った。

金色の水晶という物があればこんな感じなのかもしれない。淡く輝く金褐色の瞳を濃い金系の長い睫毛が縁取っている。肌は雪花石膏のように白く透き通り、細く小さな顎は奇跡のようなバランスを保っている。

これまでの非現実的な出来事の中でも更に現実感のない少女がそこに立っていた。

歳の頃なら16、7歳だろうか。神話の中から抜け出たような見蕩れるほどの美少女。細い手足に似合わぬ古びた外套と革の手袋、そして暗い色の帽子がその流れるような髪の大半を隠してしまっているが、月明かりに照らされた容姿は隼人の知るどんな人間より繊細と言って良かった。

しかしその手には先ほどの化け物の腕を切り落とした生臭い刃物を携えているのだ。もはや何が現実的なのか分からない。

「小娘が。こんな異界まできて妾の邪魔をするとは。異界の人間の

一人や二人、何をそんなに怒ることがある？」

「ウジ虫どもが。ふざけたことを……！」

怒気を含ませた口調で化け物に近づいた少女は、ためらいなく女の首を薙ぎ払った。すぐさま隼人に向き直ると、あまりのことに地面にしゃがみ込んでいた隼人の襟首を握って引き立たせ、そのまま射抜くようなまなざしで隼人に問うた。

「歳は？」

「え……」

「齢を聞いている。生まれてから何年経つ？早く答えなさい！」

彼女の剣幕に押され隼人は口を開いた。

「……17だけど」

それだけを聞くと今度は「リーヤ！」と虚空に向かって叫んだ。すると近くで動物の鳴き声が聞こえたかと思うと、隼人の背後からすぐさま白銀の馬が軽い蹄の音と共に姿を現した。

一体どこから、と疑問に思い、しかしすぐさま自分の見ている物を疑った。その馬には額には象牙色の角が生えているのだ。

「これって……ユニコーンじゃなかよ！」

驚く隼人を尻目に少女はその一角獣の背に跨がると隼人をあつという間に引きずり上げた。

なんと驚いたことに一角獣も後ろ足を屈んで隼人を乗せるのに協力しているではないか。

「ちよつと、待てよ。なんなんだよこれ。お前一体誰なんだよ！何で俺、こんなのに乗せられてんの！」

手綱を持った少女の後ろでとにかく騒ぐと、彼女は鬱陶しそうに振り返った。

「しっかり捕まってなさい。落とすわよ」

言うや否や馬は何もない空中を蹴ったかと思うと、岩場を登る鹿のように見る見るうちに夜空へと駆け上がったいく。満開の桜並木が微かな白い線になって遥か下へと掻き消えていく。

やがて絹のような光沢を見せる春の雲海に出た。明るい月光を浴び

て一角獣の毛並みが真珠のように輝いている。

「天馬に乗るのは初めて？」

少女の細い腰にしがみついている隼人に答えられる訳がない。彼女の帽子の前に垂れている布飾りがはためくのを食い入るように見て、この高所の恐怖をひたすら紛らわすだけで精一杯だ。

「貴方、名前は？」

「……お前こそ誰なんだよ」

やっとのことでそれだけ言い返す。少女は前を向きながら淡々とした口調で答えた。

「私はリステリカ。貴方を迎えにきたグラスレイル王国の第一王位継承者よ」

<つづく>

一角獣に乗った少女（後書き）

続きを書くように頑張りたいです。 目指せ完結！

月夜の追撃

「なに……王国だって？」

「グラスレイル。東方の小さな国よ。連合に加盟はしてるけど」

隼人は頭を抱える。そんな横文字の国は聞いたこともないし、第一この状況で連合と言われても事態が飲み込めない。

それに空の上はとてつもなく寒かった。風に吹きさらされて剥き出しの手や鼻がほんのわずかな間に硬くかじかんでしまっている。

「とにかく、俺をおろしてくれ。この訳のわかんねー状況をどうにかしてくれ！」

「無理ね。もうすぐゲートが閉じる。時間がないの」

「ゲート？」

隼人がリステリカと名乗った少女を覗き込んだ時それが頬をかすめた。頬に鋭い痛みが走って手をやるとペタリ温かな液体で指先が濡れる。

「何……まさか血？」

「追っ手か！」

リステリカが大きく身をよじって背後を見やった。そこには月光を浴びて雲海に影を落とす宙を駆ける馬が3騎。濃紺の毛並みに灰銀の尾とたてがみ、そして今隼人が乗っているのと同じ長い一本の角が額についている。

騎乗した人間は大きく弓をかまえこちらに向かって弦を引き絞った。

「おい、お前！……リステリカ！！」

手綱に集中した少女の気をこちらに向けるため大声でその名を呼ぶ。

「なあ、俺等殺されんの？なんでこんな目に遭わなきゃいけないんだよ！」

「貴方は殺されないわ。異界人は生け捕りにしなきゃ意味がないも

の！」

いいながらリステリ力は背に手を回すと素早く矢を構える。手綱を口でくわえると鞍から腰を浮かせ、振り向き様に矢を放った。物凄い勢いで空を切り、矢が一番手前の一騎に吸い込まれる。

「やった！」

思わず隼人が歓声を上げる。すかさずリステリ力の怒号が飛んだ。「黙ってなさい！舌を噛みたいの！」

落ちていく仲間を追いかけもせずに残りの2騎が着実に隼人たちに追いついてきて距離を縮める。またたく間に挟み込まれるように追いつめられる。

よく見ると青い馬に乗っているのは簡素な甲冑をまとった若い男。彼らは真横に馬を並走させるとリステリ力に狙い定めて弓を放った。その瞬間、白銀の一角獣は大きく後ろに跳躍した。正確には目の前に透明の壁があるあのごとく垂直に空を駆け上がりそのまま一回転したのである。

隼人は振り落とされないように少女に渾身の力でしがみつく。世界が回転し、胃が浮き上がるような感覚。振り回された体が鞍から投げ出されそうになり血の気が引く。去年乗ったジェットコースターだってこんな恐怖は感じなかった。

しかしそんな同乗者のことはおかまいなく、リステリ力はがら空きになった青い馬の背後に向かって矢を放った。

音もなく馬の上から男が滑り落ちていく。矢が刺さったまま足下の雲海に落下していった。

「なあ。あれ、殺したのか？」

恐る恐る訊ねると簡素な返事がかえってくる。

「そうよ」

そう答えた横顔を見て隼人は言葉を失った。瞳は奥に金色の砂をまいたように光り輝き、戦闘の興奮で頬には赤みが差している。形の良い唇はわずかに開き、呼吸をするたびに冷気のなか白い息が流れている。

リステリカは小さな舌で唇を濡らすと腰におさめていた長剣を抜き放った。最後の一騎はこちらに向かつて一直線に突進してくる。同じようにリステリカも全速力で宙を駆ける。

2つの影が雲海の上で交差した時、青い馬の？が夜空に響いた。甲冑の男がずれ落ち、そのまま血をまき散らして落馬していく。

呆然とそれを見下ろしていた隼人にリステリカが声をかけた。

「まだ間に合う。しっかり掴まっついて。……リーヤ。お前の脚を信じてる。いけ！」

白銀の馬は首を叩かれると、前足を高く掲げまたたく間に疾風のごとく駆け出した。

風が刃物のように凍てつき容赦なく隼人の体温を奪う。限界を訴えようと顔を上げた時、目の前にぼっかりと空いた巨大な『穴』が見えた。

中空にあつたのに穴だと認識できたのは、それが夜の闇とは全く異なる漆黒だったからだ。その穴に比べれば月夜の空は優雅な紫紺と言っても良い。それほどまでに異質な空間が眼前にあるのだ。

その穴の周りの空間がぐるりと渦を巻いて漆黒の部分を浸食している。間違いない。リステリカはあの穴を目指しているのだ。

「おい、冗談だろう！おろせ、おろせよ！！」

隼人は何も答えないリステリカの外套を鷲掴みにし何度も揺さぶる。しかし、彼女はわずかに隼人をみて顔を歪めると小さく呟いた。「……許して」

それ以上は聞き取れなかった。漆黒が目の前に広がって隼人は目を閉じた。

月夜の追撃（後書き）

次回いよいよ異世界。

王女の帰還

目を開くと巨大な満月が目の前にあった。金色に輝く真円。それは先ほどまで隼人の頭上に輝いていたそれとは明らかに大きい。それに足下にあつた雲海も見当たらない。

眼下には細い筋が大地を走っている。きらきらと反射して見えるので恐らく川面か何かだろう。右後方にかけては黒い塊が連なっている。山頂には薄紫の影を落とす雪化粧、その木の葉の縁のように凹凸のある稜線が雄々しく広がり、頼りなげな川を抱く形で大地を刻んでいる。

「もう大丈夫。ここまでくれは追っ手は来ないから」

下界を凝視する隼人に気が付いたのか、リステリカが体をひねって声をかけてきた。

「どういう意味だ？」

先ほどとはうってかわって穏やかな口調のリステリカに隼人は問う。

「ほら、あれがホロル山。山から流れる川にそつて里があるでしょう？ここはもうグラスレイルの領内なのよ。だから奴らは追つて来れない」

言われて隼人は目を凝らす。確かに川の縁にへばりつくように小さな灯りが見え隠れしているが、つい先ほどまで足下に広がっていたの隼人の街に比べたらその規模はほんのささやかな集落と言った程度だ。

「……人がいるんだな」

「もちろん」

リステリカはその灯り目指して一角獣を操り徐々に高度を下げていく。

川筋にそつて里に近づくといくつもの建物が見て取れた。一番高い建物は中心部の塔らしく、簡素な作りのそのなかでランタンに

似た灯りを掲げた人間が腕を振っているのが見えた。

リステリカがそれに応え手を挙げると直ぐに高い鐘の音が響き渡る。川に面した広場の上までくると、そこには多くの人間が群れをなし空を見上げ歓声を上げていた。

里の人間だろう。夜だというのに小さな子供から老人までリステリカたちを見上げている。

「俺たちの出迎えなのか？」

「私の、出迎えよ。今から降りるわ。……逃げようなんて考えないことね」

低い声でそれだけ告げると彼女は静かに広場の中央に馬を着地させた。

「姫様！姫様、よくご無事で！」

「おかえりなさいませ、リステリカ様！」

「お怪我はございませんか？リステリカ様」

あつという間に集まった人々が隼人たちの騎乗した一角獣の周りを取り囲んだ。まるで隼人などそこにいないかのように、人々が口にするのはリステリカのことだけ。

当のリステリカは笑顔でそれに応じている。

「ただいま、みんな。無事還ってきたわ」

よく通る明瞭な声で告げると人々に笑みが広がった。

多くの人がリステリカと同じような飾り布のついたかぶり物をしている。顔つきも髪の色も日本人ではあり得ない。

みなリステリカ同様、金に近い薄い色。強いて言えばヨーロッパ人のようだ。

服装も女性は長いスカートに刺繍の入った襟のないブラウス、男性も簡素なズボンと同じような上着。どこかの民族衣装のようだが、隼人には全く見覚えがない。

その人垣をかき分けるように駆け寄ってきたのは50を過ぎたくらいにの恰幅の良い女性。どいてどいて、と息を切らせながら近づき、

リステリカが馬を下りるや涙目になってその体を抱きしめた。

「ああ！姫様、本当によくお戻りになりました。本当に良かったです。もし姫様がお戻りになられなかったら、いえお怪我でもされようものならと、生きた心地がいたしませんでした！」

「マリシカ。心配をかけたわね。でも私は大丈夫よ」

「いいえ！姫様一人で異界の地へ行かれるなんて危険極まりないことです。本当に恐ろしい。もし連中に遭遇でもしたらと思うとぞつといたします」

リステリカは困ったような笑みを浮かべた。

「……それは仕方のないことよ。彼らも異界の人間が喉から手が出るほど欲しいはずだもの」

「まさか、遭ったのですか？」

「ええ。傀儡を一匹切って、追っ手を3騎落としたわ」

「なんということ！」

「大げさね、マリシカは。私を誰だと思っているの？腕ならこの里で一番よ。それにリーヤの俊足はあなたも良く知っているでしょう？」

しかしマリシカと呼ばれた中年女性はジロリと隼人を見上げた。

「でも、こんな荷物を後ろに乗せていたのでは天馬の脚も鈍るといふものです。それに何です、この異界人は。まるで南方の狒狒のような顔をしておりますね」

「それは否定しないわ」

嘲笑を込めた言い草に隼人は眉を上げる。いきなりこんな所に連れてこられて、この言われようは何なのだ。

この理不尽極まりない扱いに沸々とした怒りが込み上げ、隼人は馬の背から飛び降りると無防備なリステリカの肩に手をかけた。

「おい、お前。さつきから聞いてれば勝手なことを……」

その途端、隼人の頬が弾かれた。一瞬の出来事に隼人は打たれた頬に手を当て呆然とリステリカ見つめる。

誇り高い目が怒りをたたえて隼人を見据える。

「わきまえなさい。異界人」

「なんだと」

隼人は気色ばんだ。

こんな屈辱は生まれて初めてだ。日本で暮らしてきた普通の高校生にとつて、同じ年くらいの少女に平手打ちを食らうなど滅多にあることではない。ましてや訳の分からない世界に連れてこられ、追っ手に殺されかけるなんて。

「異界人異界人って、お前等こそ一体なんなんだよ。ここはどこなんだ。俺を元の場所に返せ！日本に帰せよ！今すぐに！」

頭に血が上り、周囲に向かって誰かまわす怒鳴りつけた。幼い子供が母親のスカートの影に隠れ怯えるのが見えたが、そんなことはもはや関係がない。

「姫様、如何致しますか？」

隼人を見つめるリステリカに耳打ちしたのは屈強な若い男。その男に金目の少女は迷うことなく命令した。

「しきたりに従い『宿主の間』へ。それと、とにかく黙らせて」

逃げる隙もあらばこそ、隼人は男に制服の襟首を鷲掴みにされると間髪入れずに鳩尾に激痛が走った。経験したことのない衝撃。

（これは、夢だ）

ありふれた日常を嫌っていたはずなのに。

……次に目が覚めたときは平凡な世界が目の前に広がっていること。

ただそれだけを願いながら、隼人の意識は闇に落ちていった。

王女の帰還（後書き）

次回、新キャラ。

赤の銀杯

『日下部、お前これからどうするんだ？』

渋い顔をした担任が顎を撫でる。

（まだ決めてません。）

『理工系の大学ならいいところ狙えるぞ。機械とか好きなんじゃないのか？』

（好きは好きですけど、進学してまでやりたいことってないし）
『もつたいたいと思うけどな、担任としては』

本当に残念そうなのは彼が物理の化学の教師だからだろう。隼人の成績は悪くない。

（うち、別に金持ちでもないし下に兄弟いるし親にあんま贅沢言えないんで）

『奨学金とかも探せば色々ある。若いんだからとにかくチャレンジする前向きな姿勢が大事だ。勉強して損になることはないんだから』

（勉強が嫌とかそういうんじゃないんです）

『まあ日下部の気持ちも分からなくはない。色々悩むよな、この時期。けどな、一度きりの人生だ。後悔しないように決断するのがいい。将来どうやって生きていくのかも含めて真剣に考えてみる機会だと思え』

期待に満ちた口調に隼人は仄かな罪悪感を感じてしまう。神妙な表情を作って返事をした。

（わかりました。考えてみます）

夜のグラウンドを歩きながら考えていた。考えるのは簡単だから幾らでも考える。でもいつかは決断しなくてはならない。自分の進む道を。自分のこれからを。

（明日の自分のことも分からないのに、将来の自分何て全然想像できねえよ）

そう思ってたため息をつく隼人の手を握る小さな指。

「お兄ちゃん」

いつの間にかすぐ近くによく知った子供がいた。

「主人、どうしてこんな所にいるんだ？」

弟の主人がその右手を掴んでいる。

「大丈夫だよ。僕がそばにいるよ」

そう告げる弟がにっこり微笑む。

微笑ましい仕草なのに、なんだろう、何かがおかしい。

「お兄ちゃんは何も心配しなくてもいいからね。僕たちの所にいれば奴らも近づけない」

「奴ら？」

うん、と弟の姿をしたそれは自慢げに頷く。

「お姉様がやつつけてくれるもん。お兄ちゃんは安心して『しゅくしゅ』のお仕事をすればいいんだよ！」

無邪気に言った子供の言葉が理解できない。

なんだろう、この違和感は。

隼人はいつの間にか夜の校庭ではなく、どことも知れない漆黒の闇にいることに気が付いた。

「お前、本当に主人なのか？だって主人は……」

そう、弟は今年15歳ではなかったか？

こんな舌足らずな幼児であるはずがない。

では、これは。この子供は一体誰だ！

「おまえ……俺から離れろ！」

自分の怒鳴り声が耳に届いて、それで隼人は目を覚ました。

飛び込んできたのは天井から垂れ下がる幾重の布。顔に当たる光は柔らかいが澄んで明るいので、今は太陽が高く昇っている時刻なのだろう。

（俺は夢を見ていたのか）

長くベッドに横たわっていたらしく体が酷く硬くなっている。首

を動かすのに難儀しながらもようやく右隣を向くと、そこには金色の瞳が怯えたようにこちらを見返していた。

しっかりと両手を胸の所で拳にして隼人を窺う様子にすぐに先ほどの夢が思い出された。

「さつき、俺の手を握ってたか？」

コクンと小さくうなずくと子供は小首をかしげた。

「お兄ちゃん、どこか痛い？ 苦しくない？」

どこか舌足らずなしゃべり方で隼人は納得する。やはりさつきの夢に出てきたのはこの子供。

「痛くもないし苦しくもない。もう大丈夫だ」

ちよつとだけ口の端を緩めせると子供はあからさまに警戒を解く。直ぐに人なつこい笑みを浮かべてベッドの縁にすり寄ってきた。

栗色の髪に世にも珍しい金色の瞳、薔薇色の頬をした子供はまるで天使のように愛らしい。その現実離れた容貌と古めかしい衣装に既視感を覚えたときだった。

「クルイル！ 離れなさい。あれほどこの部屋に入ってはいけないといったでしょう！」

叱責の声とともに小さな潜り戸を開けて姿を現したのは、隼人をこの世界に連れてきた少女。

「やっぱり、お前か」

ゆつくりと体を起こした隼人をリステリカは冷たいまなざしで見下ろした。

「喉が渴いただろうと思って。葡萄酒を持ってきたわ」

感情のこもらぬ声でそう告げると、リステリカは銀色の金属で出来た杯を隼人の目の前に差し出した。

昨晚の様子からではまるで囚人のように扱われるのかと思っていたのに。以外に立派な寢床を与えられリステリカ自ら飲み物をもつてくるとは。

相変わらず彼女の態度は高圧的なものだったが、この待遇を見ればひとまず生命の危機にさらされる心配はなさそうだ。

隼人はひとまず息をつく。銀杯の中に満たされているのは赤褐色の濃厚な液体で、濁ったその見かけからは決して美味しそうには見えない。

（ワインとは少し違うみたいだな）

寝起きに酒は若干の抵抗があつたが、それでもリステリカのいうとおり体は乾きを訴えていたので隼人はありがたく口をつけることにした。

喉に流しこむと鼻腔に金臭さが広がる。かすかなアルコールが感じられて隼人は思わずむせ返った。

「結構きついな……全部飲めそうもない」

そういつて隼人が顔をしかめるとリステリカは隼人の手から無造作に杯をひったくった。

「別に全部飲む必要はないの。『宿主の血』は一滴でも異界人の体に入ればあとは勝手に増えるから」

赤の銀杯（後書き）

次回、リステリカについて。

生け捕られた者

最初は何を言われたのか分からなかった。

全部飲む必要がないとはどういうことなのだろう？

薦められたのは不思議な味のする酒。隼人はこれまでまともに酒を口にした経験がなかった。

この煮詰めたようなとろみは何かしらを煎じ入れた薬酒だからなのかもしれない。口に残る不快な金気も金属製の杯なのだから当たり前だろう。

しかしその独特の匂いに覚えがある。

（宿主の……血？）

その言葉を思い返した隼人はすぐさま強烈な嘔吐感を催した。

そう。この良く知った鉄のような臭気は、明らかに血のそれ。

口を両手で押さえから嘔吐を繰り返す隼人に今度は透明な液体が入った木の椀が差し出された。

「気持ち悪いんでしょ？これで口を濯げばいい」

隼人はリステリカの手を椀ごと叩き落とした。軽い音とともに床に椀が転がり、こぼれた水が点々とシミを作る。驚いた少年がリステリカの肘に掴まった。

「何を、飲ませた……！」

落ちた木椀を目で追ったリステリカは呆れ顔で溜め息をつく。

「泣こうが喚こうが貴方の勝手だけど、『宿主の血』を飲んだからには諦めるしかないの」

「お前が俺を騙して、訳の分からない物を飲ませたんだろう！」
あまりのことに唇がわななき、語尾が震えた。

自分の置かれた状況が全く理解できないことよりも、隼人の意思を踏みにじられているという事実の方が頭に血を上らせる。

こんな人さらいのような真似が許されていいはずがない。

なじられたにもかかわらずリステリカは澄ました声で隼人をあし

らった。

「そのためにわざわざ異界まで出向いて若い異界人を生け捕りにしてくるの。役に立ってくれなきゃ意味がないわ」

「生け捕りにしてきた？『宿主の血』とやらを飲ませるために？」

「そう。異界人を手に入れるためには年に一度の天門満ちる春節にゲートを抜けて、あちらから生きたまま攫ってくるしか方法がない」
そのまま彼女は目を閉じる。

「今までの『宿主』もそうやって捕獲してきたのだから。そのために本当に多くの天馬と人間があちらで犠牲になってきた。還って来れなかった者だって少なくない。私たちにとっては命がけのことなの」

語るリステリカの表情は犠牲になった人々を悔やむように顰められていたが、隼人には全く同情の余地はなかった。

（常軌を逸している。この女は俺を人とも思っていない）

捕獲するだって？

攫ってくるだって？

可憐な少女が語る内容は到底隼人の許容できるものではなかった。リステリカは顔を上げると有無を言わせぬ強い視線を隼人に注いだ。

「『宿主』の能力は異界人による血の摂取によってのみ受け継がれるグラスレイルの秘技。絶対に絶えさせることは許されない」

「……お前等の事情なんか知りたくもない」

「そう。ならば何も知らずにここで大人しく養われていてちょうだい。その方が私たちも都合がいい」

そう言い捨てると、リステリカは木椀と銀の杯を携えて潜り戸に向かう。クルイル！と声をかけると未だベッドの脇で隼人を眺めていた子供が小走りに扉に向かい名残惜しそうに部屋を出て行った。

全く腹の虫が収まらない。この様子だと部屋に軟禁状態になるだろう。しかしこのままこの狭い部屋に一人放置されるのでは、という不安が頭をもたげ思わず少女に声をかけた。

「リステリカ。あんた、またここに来るんだろうな？」

呼ばれて彼女は素早く反応した。

「しばらくはそうなるわね。それと、貴方の名前教えなさい。私ばかり呼び捨てにされるのは不愉快だわ」

言われて隼人はまだ自分が名乗ってもいないことに気が付いた。

「日下部、隼人。隼人が名前だ」

「ハヤト……。相変わらず異界人の名前は変な響きね」

身もふたもない感想を残してリステリカは扉の向こうに消えた。

ホロル山は夏の盛りになってもその中腹にまで雪を残す。本来は一番高い峰のみをホロルと呼び、連なる山並みは「ホロルの娘たち」と称された。その古語ハールトゥは今では詩歌のなかに雅語として残るのみ。

かつてはその麓の大地までホロルの名で呼ばれることがあったが、今はこの地に国を作った初代グラスゴーが自称した「ホロルのグラスゴー」の訛り、グラスレイルの名がいつの間にか人々の間で使われるようになっていく。

春といってもまだ冷気を含んだ空気が山肌を伝ってしばしば吹き下ろされる。

城の玻璃越しの陽射しに油断していたリステリカは外に出るや否や羽織った外套の前を掻きあわせて首をすくませた。

城といっても粗い石を根気よく積み上げた堅牢だが優美さとはほど遠い建物だった。

2階と3階部分に明星をかたどった鉄製の格子がはめられ、その奥に緑がかった玻璃の窓がはめられている。門は人の背丈ほどの石柱が二本、そこには粗削だが素朴な一角獣のレリーフが彫つてあるだけだ。

「ハヤトはずっと城に住むの？」

リステリカは弟の質問に優しく答える。

「そうよ。彼には大事なお役目があるの。いてくれないと私たちが

困ってしまうわ」

「そつかあ。ハヤトは僕と遊んでくれるかな？そうだといいな」

「彼は遊び相手としてきたんじゃないの。あまり近づいては駄目」

そうたしなめると小さな弟は唇を尖らせて不満を表す。

まだ幼い弟がこの意味を本当に理解するのはまだ先のことだろう。現実はいないと困るなどと言う生易しいものではない。

死の危険と隣り合わせと分かっているけど、リステリカは異界にまで赴いて人間を攫ってこなければならなかった。

全ては国のため、民のため。家族のため。

あの異界の少年になんと罵られようとリステリカはかまわない。

ゲートを潜つたらもはや後戻りは出来ないのだ。

（きつとあの少年は一生私を許さないわね……）

ゲートを潜る時呟いた言葉を思い出し、わずかに口の端時を歪ませる。

しかし直ぐに頭を上げると、強い意志を宿した表情で石垣の奥にある藁葺きの厩に向かって歩き出した。

生け捕られた者（後書き）

次回、厩舎にて。

天翔る獣

藁葺きの建物の中央から入ると馬の匂いが身を包んだ。

家畜と干草と糞の独特のこの匂いは慣れぬ者には顔をしまめるものだった。がリステリカにとってはむしろ心が落ち着く匂いだった。

この土地の子供は皆もの心が付く頃になると天馬の背に乗せられる。最初は大人の鞍の前に乗せられるが、すぐに一人で手綱を持たせられる。当然天馬は空を駆ける獣なので落馬は命にかかわるが、だからこそこの土地の誰もが天馬の扱いを心得なければならない。

リステリカはクルイルの手を引き左奥に向かって進む。いくつもの馬房の前を通り過ぎ最奥の馬の前で足を止めた。

中にいる白銀の一角天馬がリステリカを認め顔を寄せる。その尾の先で長柄の箒を動かしている人間に声をかけた。

「ご苦労さま」

腰をかがめて中の寝藁を掻き出していた初老の男が振り返った。

「リーヤの調子はどう？」

「これはこれは、リステリカ様。まったくコイツは昨夜の異界渡りなぞなかったのよ。に気が有り余っておりますわ」

「今日はもう外に出した？」

「ハイ、昼前には。しばらく見ておりましたが他の馬と並んで気持ちよさげに駆けておりました」

そういつて男は白馬の背に手を当てる。リーヤと呼ばれた天馬はぶるつと首を振ってたてがみを揺らした。

「お乗りになりますか？用意いたしますよ」

「うん。今日は仔馬の様子を見に来たのよ。どう？幼角が抜けた仔馬はいる？」

「幸い、まだ。恐らくあと10日ほどで生え変わりはじめると思いますが。しかし姫様、仔馬のことを気にされているということは例の異界人はうまく宿主の血統に連なったのですか？」

不安げに問うた男にリステリカは小さく微笑みかけた。

「うまくいったわ。これでいつ天馬の角が生え変わっても大丈夫」

ああ、と男は深い皺の刻まれた手を胸にあてて安堵のため息を漏らした。

「よかった、本当によかった」

「今年の仔馬48頭。すべて来年の春までには人を乗せられるようになるわ」

リステリカは不思議そうに二人の会話を聞いていたクルイルにも笑いかけた。

「お前も天馬を持つことになる。しつかり乗馬の練習をするのよ」

「僕が馬を？本当に？」

「王家の人間だもの。誰より上手に一角天馬を乗りこなせなくてはお姉様だってクルイルの歳にリーヤをお父様から頂いたのよ」

クルイルは瞳を輝かせた。

現在、グラスレイルの王族は自分を含めて4人しかない。国王である父ガレルドに弟のクルイル。そして父の後妻でありクルイルの母コーネスカ。傍系でさえ何代も前にその血脈は絶えてしまっている。

子に恵まれないのではない。すべては皇都エランジェを守るために奉げられてしまった命だ。

ホロルに抱かれたこの国は高原の土地である。

そびえる岩山から続く礫まじりの土では当然麦は育たず、川の近くを時間を掛けて掘り起こしてわずかな芋を栽培している。あとは南の傾斜地に寒さに強い姫林檎を植えてはいるものの、とても多くの収穫は望めない。

グラスレイルの民のほとんどは山羊を飼育し日々の糧をしているのだが、それでも小麦は必要で穀物の多くは隣国から一手に買い入れている。

貧しい国だが、ここには唯一他国が欲しがる貴重な生き物を擁していた。

天翔る獣。一角天馬である。

天翔る獣（後書き）

次回、隼人はどうなる。

天馬と生きる国

雲を裂いて天を舞い、その脚は一日で千里を駆ける。翼を持たぬ一角の獣。

その姿は小柄な馬に似てはいるが、蹄は2つに割れており、岩場に巣を作って子を産み育てる様は山羊に近い。

気性は荒く滅多なことでは野生の天馬は人が触れることも叶わなかったが、グラスレイルの民は天馬を生きたまま狩る方法を知っていた。

天馬の出産は里まで雪が降りはじめたころの秋のはじめ。ホロルの岸壁の隙間を埋めるように多くの天馬が巣を作り子を産む。普段は母馬を中心とした家族単位で群れを形成する生き物だが、冬を越すときは何百頭の集団が一つに固まって巣を作る。

そして最も凍てつく冬至を待つてグラスレイルの民は天馬の仔馬を求めて巣営地である岸壁を上り始めるのだ。

落下や凍死の危険と隣り合わせであるだけでない。仔馬を守ろうとする親馬に噛み殺される場合も少なくなかったが、それでも伝統の狩りは絶えることなく続けられてきた。

こうして捕獲した天馬は人が乗れるよう一年をかけて調教し、国民全てを養う小麦と引き換えに隣国に売り渡されてきたのである。

リステリカの天馬であるリーヤはその年のもつとも脚の強い馬で、彼女が6歳のときに与えられた王族用の天馬だった。

「お父様をお願いして一番いい仔馬を選んでもらいましょう。きつとクルイルの一生の友になるわ」

「うん！」

満面の笑みを浮かべたクルイルをリステリカは複雑な思いで眺めた。

友になるというのは本当は嘘だ、とリステリカは思っている。

天馬が人に従うのは人が根気よくしつけるからでも人と信頼関係

を築くからでもない。

(……全ては宿主の血によって縛り付けるからだ)
リステリカは目の前にたたずむ白銀の高貴な生き物を静かに見つめた。

隼人は食事として与えられた土色の硬いパンと独特の風味のあるミルクのスープ、小粒の紅い木の実を平らげると、ようやく自分の入れられた部屋を見回した。

お腹が満たされると落ち着きを取り戻すというのはやはり人間の性というもの。よく考えれば昨晩から何も食べておらず、余計に気が立っていたのかもしれない。

足下には単純な幾何学模様を織られた絨毯が何枚も敷かれており、床一面を覆っている。壁は暖かみのある白い漆喰で塗り固められていて、天井は太い木で出来た梁が何本も渡されていた。

屋根は片流れの勾配がついているので恐らく屋根裏部屋かなにかだろう。建物が一番上の部屋なのだ。

ベッドの横に置かれていたフエルトのスリッパを履いて光の差し込む窓まで近づく。昔のガラス瓶のように歪んだガラスが嵌め殺されていた。さらにその外側には星の形に装飾された鉄の枠が取り付けられている。

(これは逃亡防止用か？牢屋にしては部屋の内装が悪くない)

外を覗くと滑らかな蒼天にそびえる雄大な山脈が目の前に横たわっていた。

山頂は真っ白な雪で覆われており、手前にくるほど青みがかった岩肌が地表に現れ、さらに下ると紗を広げたような萌黄の草地が広がっている。そこに見える茶色や黒の動く点は恐らく羊かなにかの家畜だろう。

いつか写真で見た外国の風景に似ている。しかしここが外国などではないことを隼人は認めざるを得なかった。

(……要はここは俺の常識の通用しない世界なんだな)

その緑の牧草地の上空を、
角の生えた馬が何頭も飛んでいたから
である。

天馬と生きる国（後書き）

次回、王様登場。

謁見の夕刻

狭い室内をうろつろと歩き回り、壁を叩き絨毯をめくり上げる。

散々部屋の中を引つ掻き回したあげく、隼人は日が暮れはじめた頃になって出入り口はリステリカが使った小さな扉一つしかないと諦めた。

（これから俺、どうなるんだろう）

部屋の中央に置かれた低い丸椅子に腰をかけて暗い溜息を漏らしたときだった。

石壁のむこうから人が近づく音がして部屋の扉が開いた。

現れたのは黒いスカートに小豆色の前掛けをした見覚えのある中年女性。たしか昨晚リステリカの出迎えのなかについて、隼人に失礼なことをいったマリシカという女だ。

「起きているね？ あんた隼人っていうんだってね」

遠慮なく隼人に近づく腰に手を当てて鼻息を漏らした。

「さあさ、ぐずぐずおしでないよ。ガレルド様があんたの顔が見たいといってる」

マリシカの言葉が言い終わらないうちに、更に後ろから若い男が二人隼人に近づき、両腕を引き上げ無理矢理立たせる。

「分かっていると思うけど失礼なこと言うんじゃないよ」

「おい、ガレルドって誰だ？」

無然としながら隼人が問うとマリシカはとんでもないものを見た、とでもいうように眉をつり上げる。隼人の目の前に指を突きつけた。「もう一度そんな口をきいたらこの私が承知しないからね。ガレルド様はこの国の王様だよ。これからあんたを養ってくださる方だ。それはそれは立派な方なんだよ」

「王様……。ってことはリステリカの父親、なのか？」

「リステリカ様とお呼び。まったく鈍臭い子だよ。姫様とは大違い。姫様はガレルド様と前の王妃様の御子だよ。クルイル様が今のお妃

様コーネス力様の御子息」

「腹違いの姉弟ってことか」

「ああ。でもリステリ力様が王位を継ぐことになるだろうね。あんな、恐れ多くも未来の国王様の天馬に乗ったんだ。分かっているかい？」

分かっているも何も、そんな事情など昨晚は知りようがない。ましてやリステリ力が未来の王様で、その天馬に乗ることが恐れ多いことだなんて分かるはずがないのだ。

マリシカの説教に納得のいかない隼人は眉間に皺を寄せた。

やれやれ、といった仕草でマリシカは肩をすくめると首を振って若者に合図をした。

「ちょ……ちょっと、まて。自分で歩ける！」

力づくで両脇を抱えて隼人を引きずろうとした若者たちを慌てて制止する。

主張のおかげか、隼人の腕は拘束されたままだったが、自分の足で部屋の外に出ることになった。

想像した通り、そこは中世の屋敷の中のような重厚な作りの建物だ。暗い廊下を抜けて突き当たりの階段を下ると踊り場の細いスリット状の明かり取りから夕暮れの光が差し込んでいる。

そのまま下がって地上階まで降り更に石の廊下を進むと小さな中庭に出た。頭上に茜色の空が切り取られた四角い庭を回り込むと、ひととき大きな両開きの扉が現われた。中央には使い込まれた鈍い光沢の金属の取っ手が下げられ、その上に星のレリーフが刻み込まれている。

マリシカが取っ手を打ち付けるとゆっくり扉が押し広げられた。

「お連れいたしました」

落ち着き払った声でマリシカが告げる。

隼人は押し出されるように部屋の中を進んだ。

左右には縄模様を施された木の柱が規則正しく並び、隼人の背丈

の5倍はあろうかという広い空間を支えている。薄暗い室内は天井近くの窓から夕日が差し込んで奥に座っている人物を斜めに照らしていた。

頭に飾り布のついた帽子をかぶった50がらみの壮年の男。隣には豊かな栗毛の女とその膝に乗ったクルイル。

そして厳しい目つきでこちらを見つめるリステリカ。

（この人が国王のガレルド、か）

マリシカ背中をつつかれ、隼人は静かな足取りでその男に近づいた。

目の前までくるとマリシカと若者たちが恭しく礼をとったので、とりあえず同じように膝を折った。

「かしこまる必要はない。マリシカ、彼を連れてきてくれてありがとう」

あたりの柔らかい低い声。意外な気安さに隼人は驚く。

しげしげと見つめると金色の物静かな瞳が隼人を見返していた。

謁見の夕刻（後書き）

次回、宿主について。

角の秘密

低い椅子に深く腰掛け指をゆったりと組んだ王の姿からは、威厳よりも物静かな老人のような思慮深さが感じられた。

「あの、はじめまして」

ほかに適当な言葉が見つからず、生真面目に初対面の挨拶をする。王は目尻に皺を寄せた。

「君のことはリステリカから聞いている。突然のことで驚いただろう。この子は気性が激しいから失礼な振る舞いをしたのではないか？」

お父様！と隣のリステリカが声を上げると軽く笑ってガレルド王は手で制した。

「分かっている。お前のような立派な娘をもって私は幸せ者だ。私の体が自由が利けば、お前にこんな苦労はかけなかったものを」

隣に座った臙脂のドレスの女性がリガルドの手にそっと触れる。

恐らく妃のコーネスカだろう。膝の上のクルイルも気遣わしげな視線で見上げる。

夫妻と子供の仲睦まじげな様子に対して、一人で佇んみこちらを見据えているリステリカはどことなく距離を置いているように見えた。

王の髪は琥珀色、王妃も王子も赤みがかった栗色で、差し込む夕日を浴びてますます蜂蜜色に煌めくリステリカの髪は、そのままこの家族の中での彼女の異質さのように思えてしまう。

三つ編みにまとめた髪を肩に垂らし光沢のある碧い衣装を身にまとい、すつと背筋を伸ばしたリステリカは昨日とは違ってかわって一国の姫らしい気品があった。

王は改めて隼人に声をかけた。

「君の安全は保証しよう。生活にも不自由はさせない。欲しいもの、したいことがあれば何でも言ってほしい。最善を尽くそう」

「俺は……ただ元の場所に帰りたい。それだけです」

隼人がそういうと場に硬い空気が漂った。

少し口元に手を当てるトリガルドは隼人に告げた。

「大変申し訳ないことだが、君にはこの地に留まってもらわなければならぬ」

「帰る方法はあるだろうか？」

「あつたとしても承知できない。この国に必要な人間なのだ。君は宿主になったのだから」

「……リステリカが飲ませたあれか」

マリシカが咎めるようにこちらを見たがかまわず続ける。

「第一、宿主つてなんだ？俺は何のために連れてこられたんだ？説明もなしに留まれと言われて大人しく従う人間なんかいないだろ」

「たしかに君はそれを知る権利がある。？？伝承に曰く、宿主の血は異界人によりもたらされた天馬を従える希なる力」

「天馬？」

「君が乗ってきた馬のことだ。額に角を持つ天翔る馬をグラスレイルの民は使役する技を持つ。生まれて間もない仔馬をホロル山から捕らえてくるが、それだけでは人は天馬に乗れない。乗ったとしても瞬く間に空へと駆けていき二度と戻ってくることはなだらう。天馬を使役するのには仔馬から抜け落ちた幼角を使うのだ」

言葉をついでステリカが首からペンダントを引っ張りだして目の前にかざす。

その革ひもの先に紅い牙のようなものがぶら下がっていた。

（あれが……天馬の幼角）

「冬に生まれた仔馬は春に角が生え変わり、それから宙を駆けるようになる。しかし宿主の血で染めた幼角を人間が持つと天馬はその人間に従うようになる」

「つまり宿主の血染めの幼角をもつ人間が天馬の主になれるってことか？」

「その通り。そして我が王国は東クロカース連合に加盟している国

で最大の天馬の供給国でもある。天馬は人を乗せて空を飛ぶ唯一の獣ゆえ需要が高い。もちろん軍事にも重用される。毎年春になると一年間調教した天馬と一年分の小麦とを交換してきた。そういう盟約なのだ」

「軍馬の生産の為に俺を誘拐してきたっていうのか、あんたたちは」
「……そういうことになる」

「はっ、冗談じゃない！」

隼人は吐き捨てた。

聞けば聞くほど許しがたかった。

この国がどれほど天馬を必要としてるか知らないが、他人の人生をめちゃくちゃにする理屈にはならない。しかもこの話では毎年血の提供をしなければならぬということ、それはつまり一生続くということではないか。

「それが俺とどんな関係があるって言うんだよ。俺を返せよ。行って帰って来れるんだ。帰れないとは言わせない」

「ゲートは一年に一度しか開かないわ。それにまだ今年分の血をとってない。もし貴方が帰れたとしても私は別の誰かをまた連れてくる。今度は貴方の家族かもしれないわよ。貴方、それでもいいの？」

リステリカの言葉はどこまでも冷たい。

卑怯だ、と隼人は唇を噛んだ。

角の秘密（後書き）

次回、第三の勢力。

襲う影

睨み合うこと数秒。

お互いに折れる気がないのを感じ取ったのか、栗毛の女性が割って入った。

「リステリカ、隼人さんの気持ちも汲んであげなくては。隼人さん私も民を代表してお願いいたします。この国には貴方が必要なので」

義母にたしなめられたリステリカは口を硬く引き結んで視線をそらす。

「……俺にだって、学校もあるし、家族も友だちもいた。こんなの一方向的過ぎる……」

「本当にすまない」

ガレルドがは沈痛な面持ちで陳謝したが、それだけに隼人を元の世界に返す気がないことが分かった。

（ここには俺の味方は誰もいない）

異界人としての自分を必要とする人はいても、隼人に同情して元いた世界に返そうとしてくれる人などいはいしない。

全くの未知の世界で自分は残りの人生を過ごしていかなばならないのか。

その残酷な現実を前に、目の前がだんだんと暗くなっていた。

それから三日、隼人は運ばれてきた食事に手をつける気になれなかった。しかし空腹で眼を回して倒れてからは、隼人が食事を平らげるまでリステリカかマリシカに側で監視されるようになった。

そして十日目、銀盆と小さなナイフを携えてリスリカが隼人の元を訪れた。

「それで血を採るのか？」

背後に控えた屈強な男をみて隼人は薄く笑った。

「大して痛くないわ。宿主になると傷の治りもひととき早くなるし。そういう能力なの」

「だったら自分でやれよ」

皮肉を込めてそういうとリステリカはキツ顔を上げる。

「出来るものなら当然そうするわ。さあ、腕を出して、男なら覚悟をきめなさい」

慣れた様子で隼人の二の腕に紐を巻き付けると、肘の内側の柔らかい部分を擦り手早く血管を浮かび上がらせる。そこをめがけて小さなナイフを静かに差し入れると、ふつくりと暗褐色の血液が流れ出てきた。

多少の痛みは感じたが、想像したほど野蛮な方法ではなかった。

純粹に医療行為のような黙々としたものだ。

滴った血を受け止めている盆にはゆっくり赤い色が広がっていく。

「どのくらいとるんだ？」

「この器の底が見えなくなる程度よ」

そういつてリステリカは白くなった隼人の手をさする。慣れた仕事草だった。

しばらくすると銀の盆には十分な血液が満たされ、それは後ろの男達によって部屋から運び出された。

一連を見届けたリステリカは肩の力を抜くとすぐに向き直って隼人の腕の汚れを拭い包帯を巻いた。

全て処置し終わるとなんとあつけない。ものの十分もかからなかったらう。

「これで全部か？」

「ええ。来年の春まで貴方に用はないわ」

その言い方が相変わらず可愛げがない。

「お前、慣れてるんだな」

「当然よ。これは王族の大事な役目。毎年の儀式だもの」

「去年もお前が血を採ったのか？」

「ええ。そうよ」

その言葉に隼人は眼を細めた。

「その宿主になつてた人間は今どこにいる？」

リステリカの手がとまる。白い顔が隼人を正面から捕らえ、口を開こうとしたそのときだった。

何かが爆発するような、耳慣れない衝撃音。続いて人の叫び声。

異様な気配にお互いに眼を合わせたとき。

「姫様！大変でございます！」

スカートを翻して部屋に飛び込んできた若い侍女をリステリカが受け止めた。

「どうした？何があつたの？」

覗き込むようにして息の上がつた女を促す。女はリステリカに縋って叫んだ。

「いま、王城にギルメa軍が……！クルイル様が人質に……！」

言い終わる前に下から更に地響きのような音がした。

その轟音を聞くや否やリステリカは部屋を飛び出していく。

この世界の住人でただ一人、健気に隼人を心配してくれた小さな男の子。

「おい、クルイルが人質つてどういうことだ！」

床にへたり込んだ侍女の肩を揺さぶると女は口に拳を当てて震え出した。

「……なんの警告もなかったのです。突然ギルメの騎馬兵が城に押し寄せ、王の間に侵入しました。そこには老師と遊んでいたクルイル様がありました。兵士は有無を言わさずクルイル様を連れ出し、それを阻止しようとしたガレルド様に向かって激しく燃える黒い玉を投げつけました」

「黒い玉？」

「ええ。見たことのない武器でした。私は柱の影に隠れましたが、ガレルド様は……」

そのまま手で顔を覆ってしまう。

隼人は一瞬の躊躇の後、小さな扉を潜ってリステリカの後を追っ

た。

襲つ影（後書き）

次回、外へ。

奪われた王子

「何処だ！リステリカ！」

隼人は階段を駆け下り細い廊下を走った。途中で狼狽し逃げ惑う人々とすれ違ったが誰も隼人にかまう余裕はないようだ。そのまま四角いの中庭を突っ切って例の王との謁見の部屋に入ると、途端に黒い煙にむせ返った。

剣が打ちつけ合う甲高い金属音。複数の人間が入り乱れて張りあげる怒声。

滲みる眼を開けて中を窺い少女の姿をさがす。

（ここじゃない）

隼人が踵を返そうとしたとき腕が抜けるほどの力で肩をつかまれた。

「お前、なぜこんな所にいる！」

中庭まで引きずり出され相手を見上げると、それは先ほどリステリカの後ろで隼人を見張っていた若い男だった。手には剣を握りしめ生々しい刀傷が眉間から耳に走っている。

「リステリカはどこだ？あいつが危ない！」

「落ち着け。王の怪我は大したことはない。クルイル様の奪還のため、いま兵の指揮を……」

隼人はその言葉を早口で遮る。

「あいつは嵌められた。家族を傷つけられて頭に血が上ってる」

「お前の所にいたのだろう。宿主の間なら奴らもすぐにはたどり着けんはずだ」

「俺の所に侍女が来た。妙に詳しく説明をするから変だと思った。音がしてからすぐに報告にきたんだ」

男が怪訝な顔をする。

「つまりあの侍女は買収されている。リステリカをおびき出したんだよ！」

聞くや否や男の表情が一変した。すぐに何人かの仲間を呼んでリステリカを探させる。

未だ激しく続く戦闘の合間を縫って男は隼人を連れて物陰に隠れた。

「お前は戻れ」

「あそこに居たってすぐ踏み込まれるさ。俺は生きて元いた世界に帰る。だから自分の身は自分で守る」

そういつて部屋から出るときに掴んできた小さなナイフを取り出した。

しかし部屋で見た時に鋭利な刃物だと思えたそれも、男の使う長剣に比べると何とも華奢なことこの上ない。

「……そんな小物で何をする。これを使え」

口元を緩ませて男は持っていた剣を手渡した。ずしりとした重みに手首がしなる。あらためて柄を握り直すと手のひらはじっと汗で濡れていた。

（本当の人殺しの道具なんだ）

それは刃物というより鈍器に近い。

「いいか。自分の身を守ることを考える。これから城の外に出てお前を逃がす。石垣を越えた向こうに川を渡る橋があるから、その道をまっすぐ山に向かって走るんだ。ずっと行くと岩壁に小さなほころがある。そこに女子供は避難している」

「あんたはどうするんだ？」

「恐らくリステリカ様はリーヤの元だ。クルイル様を追うにしても、ここの騎馬兵を蹴散らすにも天馬は必要だからな」

そうか。あのリステリカのこと、最愛の弟を取り戻すためなら天馬を駆って何処までも追ってゆくだろう。

苦いものが胸の中に広がるのを感じながら、隼人は男の背を追って城の扉の外へ出た。

隼人の目の前を何頭もの黒い馬が走り去っていった。

馬上には鈍い色の甲冑をまとった騎士たち。

（あれがギルメの兵士か）

「……奴ら、引き上げるつもりか」

確かに男の言葉通り、大方の兵士は城から遠ざかった坂道の更に向こうに去っていた。歩兵の数は多くなかったのだろう。少数精鋭の部隊だと言う訳だ。

道は踏み荒らされて土が舞い上がっている。住民は家の中で潜んでいるようだ。

「リステリカ様！」

隼人の前を走っていた男が叫んだ。

坂の上にある石垣のその先にリステリカはいた。

白い天馬に跨がり、三騎を相手に踊るように剣を振るっている。

隙を見て空に駆け上がりうとすると黒い一騎が網のようなものをひろげて構えているのが見て取れた。

「お逃げください！」

猛然と突進していく彼は丸腰のはず。一騎がこちらに気づいてその手綱を寄せ、相対して馬の腹を蹴った。

慌てて隼人はその後を追う。逃げろ、と言われたことは覚えていたが男を放つては置けない。

無謀に思えた男は、しかしに急に屈んだかと思うと乾いた礫まじりの土を手のひらいっぱいに掴み、すぐさま向かってくる馬めがけて投げつけたのである。

それからはあつという間だった。

怯んだ騎馬兵に気づいた残りの敵は、剣を構えた隼人を認めると素早く合図を交わして退却していった。

「ご無事でございますか！」

馬上で息を切らせるリステリカは絞りだすように呟いた。

「……クルイルを取り返す」

その瞳はいつか見たように燃え上がる金色に輝いていた。

奪われた王子（後書き）

次回、やっと東クロカースの陣営が。

北の国、南の国

グラスレイルは西内海であるトラペス海と東に広がるキサ湖の間を遮るホロル山脈、そのちょうど真ん中に位置する高地の土地である。冬は険しい山脈からの風と雪にさらされ、夏は高地特有の乾いた空気に包まれた初々しい春のような陽射しが続く。

水源はホロルから流れるソテス川が頼りである。下流にゆけば支流を飲み込んで一端の河川に育つそれも、この山岳地帯では岩場を這う細い流れに過ぎない。

家畜を放牧するための丘には辛うじて山羊を肥えさせるだけの芽吹きが期待できたが、それでも民の全てを満たす糧とは言いがたかった。

グラスレイルの民がこの地を選んだのはひとえに一角天馬のため。稀少な空飛ぶ獣は常に権力者の所望するものであり、グラスレイルは常に時の権力者にその技能を提供することで辛うじて自治を守っている。

東クロカース皇国。

トラペス海の北に位置し、大陸の西に突き出た半島を擁する大国。それが現在のグラスレイルの同盟国であり、実質的な宗主国でもある。

そしてその東クロカースの最大の敵対国がトラペス海の南方の国家。

ギルメ帝国であつた。

「ギルメの兵士が我が国土に侵入してきたのですよ？」

「落ち着け、リステリカ」

「お父様こそ、どうして落ち着いていられるのですか！クルイルが、我が国の王子が攫われたのです。今すぐにも取り返しにいかねば！」

傷つき横たわった国王の枕元にひざまずいて金眼の少女は叫んだ。

「お前一人で戦でも仕掛ける気か？ 勝ち目はないぞ」

「勝ち目がないから諦めると？」

「人の上に立つ者が、勝ち目のない戦を仕掛けるなど愚の骨頂。民の命をみすみす危険にさらすつもりか」

「そんな、つもりは……」

静かな叱責にリステリカの言葉は詰まる。

「一国の王子を誘拐したとなればそれなりの要求があろう。おそろく天馬の要求か、あるいはグラスレイルの秘技を狙ったのか。とにかくお前がギルメに乗り込むなど一利もないことだ」

悔しげに顔を歪める娘の頭にガレルドが手を乗せる。

「落ち着け。心配なのはみな同じだ。それでも我々のみでギルメをどうにか出来るなどと考えてはいかん。お前は優しい子だ。私はお前のことも大事なのだよ」

穏やかな声で諭されてリステリカはおもむろに顔を上げた。

迸る激情を歯を食いしばって絶えているのが良くわかる。

あらためて隼人はこのガレルド王の器の大きさを認識した。

謁見のときからその聡明さと他人を受容する柔軟な態度を感じてはいたが、一時的な怒りで冷静さ失っている娘を包み込む様は善き父親であり良き君主であることが容易に察せられる。

（父親とは正反対なんだな）

当のリステリカは馬上での戦いの後、そのままギルメの兵を追っ手いこうとしたところを隼人と一緒にいた男<イザルクというらしい>に説得されてやつとのことで王城まで連れ戻したのだ。

「それにまた襲撃があるかもしれない。その場合の備えをしないと」

「……はい」

しおらしく返事をするリステリカをみて隼人は思わず口を挟んだ。
「だけどクルイルは？ 助けないのか？」

思わぬ人物の発言、とでも言うように部屋の中にいた全員の視線が隼人に集まる。しかしコーネス力が嗚咽をこらえたのを見て隼人

は自分の言葉を激しく後悔した。

「悪気はないんだ。ただ俺に出来ることがあればって思って……」
しどろもどろに釈明するがもう遅い。マリシカに至っては真っ先に隼人に噛み付いてくる。

「あんた、王妃様に何てこと言うんだい！」

部屋から追い出さんばかりの剣幕。この婆やは本当に王家の人々を慕っているらしい。いや、マリシカだけではない。このグラスレイルの国民が、みなガレルドを始めとする王家の人々を敬っているのがこの数日で隼人にも分かっていた。

だからこそクルイルを取り戻す必要がある。

「俺だつて誘拐された身の上だ。だからこそこんなことは許せないっていつてるんだ」

いきなり連れてこられた異世界。強制的に宿主とやらの役目を負わされて。

自分がこれほど理不尽な怒りと恐怖を感じたのだから、幼い子供が敵国に攫われたとなればそんなに恐ろしい思いをしていることだろう。

殺される心配はないとはいえ、どんな扱いを受けるのか想像もしたくない。

「……君の言う通りだ、隼人くん。申し開きのしようもない」

ガレルドが包帯のまかれた半身を起こして隼人を見やり、そして強いまなざしでリステリカを見据えた。

「クルイルを取り返すため、東クロカースに助力を乞う。……王の名代として皇都エランジェに行け」

北の国、南の国（後書き）

次回、旅立ち！

都への使者

「むやみやたらと下を覗くな。落馬しても知らんぞ」

イザルクの穏やかな笑い声で注意を促された隼人は慌てて姿勢を正した。

遙かな足下には淡い緑の斜面とそれを這うように流れるソテス川。ホロルの娘たちの灰青色の岩肌はすぐ横に迫っている。

乗馬の経験などない隼人にとっては軽やかな天馬の乗り心地さえ、頭が上下して何とも危なっかしい。しっかりと鞍の前を掴み他に遅れまいとしているが、実際足手まといになっているのは良くなる。

手綱は前のイザルクに引いてもらい左右と前を囲まれるように空を行く。

当然、一行の先頭は白銀の天馬のリステリ力だった。

グラスレイルの飾り帽子をはためかせたその小さな姿は、今は遠い。

防寒用の手袋と鳶色の厚い外套を身にまとっているのは他の者と同じだが、ひとり張りつめた気配を漂わせていた。

日も天高くなってきた昼、今は皇都エランジェを目指しての旅の途中である。

グラスレイルの王城を出たのは昨日の早朝。襲撃の翌日のことだ。同盟国である東クロカースの都におもむき、今回の詳細の報告と王子奪還のための助力を乞うためである。

この世界のことはまだぼんやりとしか分からない隼人でも、戦争状態や政治的な駆け引きが国同士であるということに少々驚いた。なにせユニコーンが空を飛ぶ世界である。もっと幻想的な神秘の世界を想像していたのも無理はない。

実際は空飛ぶ獣と日本で見た女の化け物以外は、魔法や妖精などといった非現実的な光景は見当たらなかった。代わりに文明の遅れ

た中世ヨーロッパのような封建的な世界の断片が垣間見える。

（世界史で言えば15世紀ヨーロッパってところか。石油とか使ってる様子ないし）

いろいろ考えては見るものの、いかんせんグラスレイル自体が貧しい国であることはすぐに分かったので、皇都がどのような場所なのかは想像するのは難しい。

リステリカは幼い頃に一度訪問したことがあるらしく、綺麗な宮殿がある所、とだけ教えてくれたのみ。

今回の旅には王の名代としてのリステリカ王女、その近衛としてイザルクとサイオン、侍従長のウライ老師、最後に隼人が加わっている。

一刻も早く皇都に着きたいリステリカはむっつりと押し黙ったままだ。

当たりを見回していたサイオンが不意に声を上げた。

「姫様、沼があります」

指差す方に眼を向けると確かに白く光る水辺が見える。ソテス川の水を満たしている小さな沼。

「これはちょうど良い。爺は姫様ほど馬術が得意ではないもので、ちと休ませてくだされ。それに馬にも水を飲ませてやっても良いかの？」

やんわりとした口調でウライ老師が訊ねると、それまで前方しか見ていなかったリステリカがこちらを向いて苦笑いした。

「私こそ、気づかず申し訳ありません。あそこで食事にしましょう」
そういつて窪地の小さな沼に天馬の首を巡らせた。

驚くほど冷たく澄んだ水を隼人は自分の革袋に詰めた。隣では鳶色の天馬が静かにのどを潤している。

都まで天馬を全力で走らせれば丸三日だとい聞いた。しかし今回は全六日の日程で進んでいる。

老人と素人が道連れでは仕方ないのかもしれないが、それでも隼

人が一番馬の扱いが下手なのは明白だ。

（こんなことなら残っていた方が良かったんだろうか）

不安が首をもたげたが、隼人は頭を掻いてその考えを振り払った。
『俺も一緒に行く』そう告げたときの周りの反応を思い出すと隼人は吹き出してしまう。

皇都の力を借りるのだからそれなりの対価は必要だ、と聞かされとつさに思いついたこと。

それは隼人の「宿主の血」。

グラスレイルの秘技とまでいわれ、命の危険を侵してまでも守ってきた天馬を操る技。

恐らくギルメの狙いもそれだ、と聞かされ改めて自分の負わされたものの重大さを知った。

だからこそ、対価としての価値がある、隼人はそう考えたのだ。

『自分の血は貴重なんだろう？その俺が質草にでもなつてやれば相手もこつちを信用して力を貸してくれるんじゃないのか』

我ながら、突飛な発想だと思う。自分に底までの価値があるのかまだ良くわからないこの世界の常識や掟。

しかしほんの少しでもあの少年を助けるために自分ができることがあれば力になりたい。

それはクルイルに弟の面影を重ねてしまったからかもしれないかった。

そしてリステリカ。

彼女が勅使として遣わされるならば、いつ戻るとも知れない彼女をただ待っているだけなどありえない。

自分はなんとしても日本へ帰ると決めているのだ。

万が一、彼女が春節に戻らなかった時、自分はまた一年待たなければならぬ事態に陥ってしまう。

現在グラスレイルでまともに乗れる天馬はリーヤを含めて全ての回の皇都への騎乗となるときいた。

出来る限り天馬とリステリカから離れてはならない。

そうすることが元いた世界へ帰る可能性が一番高いということをし、
このとき隼人は既に心得ていたのである。

都への使者（後書き）

次回、邪魔者。

月下の巡り合わせ

沼での小休止を挟んで再度西に向かう。

気が付くとホロルの山並みがだんだん後ろに遠ざかる進路を取っていた。

二日目には完全に山脈からはなれ、その姿を太らせていくソテス川に沿ってひたすら走る。高地から標高が下がっていったせいか、刺すような空気の冷たさが和らいでいく。

大地には緩やかな起伏を覆う背の低い植物、その合間から覗く白茶けた土。地平線の向こうまで広々と続くのは乾いた風の吹き抜ける大草原地帯だ。

人がいそうな集落は全く見当たらない。代わりに黒くうごめく羊の群れと、その少し離れた所に丸いテントのようなものが一つぽつねんと張られている。

似たような光景をたしか教科書で見た。恐らく遊牧民の移動式の家なのだ。

（人のやることって、どの世界でも同じようなもんなんだな）

きつとあのテントの中には隼人が決して交わるはずのなかった人間が暮らしている。それを今こうやって空から眺めているのは、何とも不思議な気分がした。

ようやく馬の揺れに体が慣れてきたころ、行く手の先に草原の終わりがあらわれた。

「あれは海岸線？」

真横に伸びる水辺の縁に隼人が訊ねるとウライ老師につこり笑った。

「さて、海と言えば海だが。あの向こうにはギルメ領が広がっているの。このトラペス海から大海原に出るには皇都の甘露海峡を通らねばならない」

「内海ってことか」

「そうなる。この辺りはトラペス海の恵みで塩作りも盛んだな。もつと西に行けば香桃の木から蜂蜜も豊富に取れる。甘味も塩も豊かだし魚も穫れるゆえトラペス海沿いは食い物が美味しい」

「面白いな」

「そうかの。お前さんの故郷はどんなものを食べるのか？」

「普通に米食べてるけど。あとパンも。肉と魚と野菜と果物とか……まあ、何でも食べるよ」

何気なくそういうと、ウライは深く頷いた。

「人より長く生きている分、異界のことについては多少は僕も聞き及んでいるが。やはりこちらとは違うの。お前さんは貴族の子供か？」

「まさか。普通の学生だよ」

「なるほど。やはり異界は魔法の技が生きているのだろうか。こちらでは子供が学舎に通い、飢えを知らずに生きていけるのは僅かな特権階級の子供だけじゃ。先ほどみた草原に遊牧民がいたじゃろ？あそこの民は一生あの地で羊を飼う。字も読めんし魚を食べる機会もない」

隼人は後ろを振りかえる。先ほど上空を飛んできた草原は今ほ遙か後方の緑の霞みにしか見えなかった。

「グラスレイルは貧しく厳しい土地だが安らかな国じゃ。ホロルに守られ大きな戦渦に巻き込まれたこともなかった。天馬のおかげで自治も守られておる。王家には皆感謝しているのじゃ」

「宿主の血を守り続けてきたからか？」

「そうじゃな。お前さんには酷なことだが」

それは何度も聞いたことだった。誰もが王家のことを褒める。天馬に頼らずには成り立たない国だけに、その役目を担う王族は尊敬されている。

（国民の生活を一身に背負って、王家の方々も大変だ）

リステリカに初めてあった時、気圧されるほどの誇り高さを感じた。居丈高に命令するその様が堂に入っていて、隼人は完全に吞ま

れてしまったのだから。

王位を継ぐ者として育てられた彼女は父親の思慮深さの代わりに、獅子のごとき勇敢さと自尊心を持ち合わせている。施政者としてはいささか不安が残る気性だったが、それが凶とでるか吉と出るかは隼人の知る所ではなかった。

内海の沿岸にそって進み日暮れに小さな川を見つけて地上に降りた。

この度では一度も宿に泊まっていない。聞くとこの辺りには宿があるような大きな街はないとのこと。もつと皇都に近づけば商隊の行き交う交易路にさしかかるらしいが、それまでは野宿が普通なのだという。

幸い乾いた土地で雨に濡れる心配はなかったが、日が落ちてからの冷え込みが隼人には堪える。

「なに、お前は火の番をしてればいいさ。俺がその辺で燃えそうな物でも拾ってくる」

腕をさすった隼人をサイオンが気遣ってくれる。二十を少し過ぎたばかりのこの若者は周りへの気配りを忘れない。

イザルクは小川で水を汲んできてお湯をわかし干し肉、乾燥芋で簡単な夕餉を用意する。あたりに生えていた香草を揉んでいれると良い香りが湯気とともに立ち上った。

簡素だが温かい汁物を腹に入れると急速に眠気が襲ってくる。早々に全員が身を寄せ合うようにして外套にくるまると土をかけて炎を消した。

月明かりが煌煌とトラペス海を照らす。隼人はその水面を見つめながらやがて深い眠りに落ちていった。

気が付いた時、隼人は口を塞がれていた。
「静かに」

押し殺した無声音。顔に金色の髪がかかっている。

「リーヤたちが何かに気付いた。音を立てないで」

そういうとリステリカは身を起こしてそろそろと移動する。腰に差していた護身用の短剣を素早く抜き前に構えたまま中腰になる。

「野犬か？それとも夜盗？」

「分らない」

静かなやり取りを縫って何かが石を蹴る音が響いた。天馬の背後から黒い影が動く。二本足のシルエット。

その瞬間、俊敏な豹のようにリステリカが飛びかかった。

「動くな！大人しくしろ！」

相手に馬乗りになったリステリカが鋭く叫んだ。

隼人は慌てて彼女の背後から駆け寄ると、押し倒された人物の両手を拘束する。

刃物を押し付けられた相手は抵抗する様子はない。紫のターバンを払って顔をのぞくと、その男は薄い笑みを浮かべていた。

褐色の肌に目鼻立ちのくつきりした若い青年。

その容貌が月下にさらされると、リステリカはナイフを持つ手を緩め眼を見開いた。

「……久しぶり。リステリカ」

名前を呼ばれた少女は惚けた声でつぶやいた。

「まさか、ユーアン……？」

月下の巡り合わせ（後書き）

次回、彼の正体は？

紫巾の青年

「本当に貴方なの？どうして、なぜこんな所に……」

「それは簡単には説明できないな。とりあえず君」

「そういつて男は隼人に顔を向けた。」

「手を離してくれ。僕は見ての通り彼女の知り合いだ。捕らえられるいわれはない」

「あ、ごめんなさい！」

「言われて慌てて身を離したのはリステリカで隼人はそれに倣って男の手の拘束を解く。」

「身を起こした男はその端正な顔を和ませた。」

「リステリカはそのまま僕に乗っていてくれも良かったのに」

「やめてちょうだい。そういうところ相変わらずなのね」

「そういうところって？」

「言葉で相手を弄ばうとするところよ。分かっているくせに分からない振りばかりして」

「それが僕の身上なんだから仕方ない」

「男は服に着いた埃を払って立ち上がった。袖の長い上着に共布のゆったりしたズボン。頭には藤色の長い布を幾重にも巻きそれでも余った端を肩に垂らしている。」

「こいつ誰なんだ？」

「隼人が側に立つリステリカに訊ねると、素っ気ない声がかえってきた。」

「ただの許嫁よ」

「ただのとは酷いな。未来の婿殿に」

「まだどうなるか分からないわ」

「取りつく島もない。」

「親しげな間柄なのは分かったが、お互いが好意を持って婚約をしているという訳でもなさそうだ。」

すらりとした体躯の男は困ったような笑みを浮かべてリステリカを見下ろしている。小柄なりステリカと長身の男では兄と妹のようだ。

やがて背後からイザルクたちが駆け寄ってくる。男の姿を認めるとウライ老師が声を上げた。

「貴方はまさか、ユーアン様ではありませんか！」

「ウライか。元気そうじゃないか。お前たちこそこんな所で何をしている？まさかトラペス海岸への物見遊山ではあるまいな」

「滅相もございません。我々はエランジエを目指しての旅の途中でございます」

「皇都へ？あんな忌々しい場所へいっても何もないぞ」

「火急の用があるのです」

恭しく述べたウライの言葉にユーアンは思案顔になった。

「事情がありそうだな。よし、僕为天幕が近くにあるからついてこい。ここよりはマシな寝床を用意しよう。なに、僕一人では持て余していたところだ」

「随従は？連れていないの？」

「自分のことは自分で出来るさ」

ユーアンは口の端で笑った。

「で、ずっと彼が気になっていたのだけれど何者なんだい？」

少し離れた所の天幕につくとユーアンは開口一番にリステリカに訊ねた。

もちろん『彼』とは隼人のことである。

「彼はそう、グラスレイルの客人よ。臣下ではないの」

「君がもてなしているということは相当身分の高い人物なのかな」

「さあ、どうかしら」

チラリと隼人を横目で見る。

（勝手に誘拐して無理矢理血を採って。自分とこの客人とは、よく言えたもんだ）

平然とうそぶくりステリカに隼人は正直舌を巻く。核心に触れぬ紹介の仕方だったので、余計なことを言うべきでないと空気を讀んで反論はしなかった。

むしろこの飄々とした男について俄然興味がわいてきた。

「俺、隼人っていいます。よろしく」

二人の会話に割り込んで男に手を差し出した。会話の主導権を握ってしまえば多少の不当な扱いにも眼をつぶろうというもの。

しかし、ユーアンは差し出した手と隼人の顔を見比べるばかり。そしてパツと何かに思い当たった顔をすると思ひに親しげに手を握ってきた。

「はじめまして。僕はユーアン・エランジウタ。以後お見知りおきを。隼人」

「エランジウタ？」

「そう。エランジウタ。エランジエを治めている一族の七番目の息子といったほうが分かりやすいか」

隼人にとって分かりやすいはずがない。

「つまり、東クロカース皇国の第七皇子ってことですね」

反応の薄い隼人にウライ老師が助け舟を出してくれた。しかしそういわれても隼人にはいまいちその身分の偉さが実感できない。何せ王だの姫だのついこの間まで無縁の世界で生きてきたのだから。

惚ける隼人にユーアンは面白そうな視線を投げ掛けた。

紫巾の青年（後書き）

次回、目的地は目の前。

潮の都の占い師

薄暗い大理石の回廊を抜け、海に面した庭に出ると白い太陽の光と爽やかな潮の香りがファナを包んだ。思わず足を止め眼をすがる。

光溢れる庭には淡い紫の花弁を振り散らす大木と、美しさを競う乙女のように咲き並んだ遊蝶花が春を謳歌していた。

青く輝く海峡と優雅に舞う海鳥の姿も相まって、それは訪れた者を夢心地へと導く光景である。

すべらかな床はそのまま緑の庭を突っ切って端にあるテラスまで続いている。奥の東屋に目的の人物を見つけてファナは春の陽気で暖められた小道を辿った。

その男の視線は透かし彫りの白い欄干から眼下に広がる海峡と、その向こうに広がる町並みに注がれている。

憂いを秘めた黒い瞳は涼しく同じく黒い髪は墨を吹き流したように頭に巻かれた象牙色の布巾は風に弄ばれその彫刻のような容姿に彩りを添えている。

地面につかんばんかりの長衣には細かく銀糸で縁取られ、その首には黄金の環が嵌められている。華美ではないが身につけているものは全て平民では手の届かないもばかり。

それもそのはず、本来ならばファナが一生口をきくことはおろか、その姿を見ることなど叶わない身分の人間なのだ。

潮風で乱れた髪を整えてファナは深々と叩頭した。

「お呼びでございますか。イーエン様」

東クロカース皇国、第二皇子。イーエン・カウ・エランジウタ。

その足下にひざまずくと男はそのまま口を開いた。

「遅かったな」

「申し訳ございません」

ファナは更に頭を下げる。玉を連ねた首飾りが石の床にあたって

音を立てた。

「お前に用を申し付ける。本日、賓客の間にて易を行ってもらう」
「はい。仰せのままに。結果はどのようにいたしましょう？」

イーエンの命令に素直に応え、その希望を問う。

占い師として宮殿に召し上げられたのは3年前。当時のファナは
辺境の村に住む占いが得意なだけの貧しい少女だった。

祖母から教わった玉の首飾りの占いはそれなりに当たったが、自
分では特別なことだと思ったことはない。この辺りの住人はみな占
いを生活の一部としてきたのだ。

しかし都からの易者を探しているという男たちがきて状況は変わ
った。村にいた若い娘で占いが出来る見目の良い者は全て宮殿に召
し上げると言う。

最初は半信半疑だった親たちも、都人が取り出した金銀宝飾品を
差し出されて直ぐに首を縦に振った。

若い娘は年頃になると持参金をつけて嫁に出さねばならない。こ
の地方では家畜より役に立たないと金喰い虫だと親が娘を捨てる村
もあるほどののだ。

当時十二歳だったファナも近所の娘たちと一緒に都人に連れられ
て村を出ることになった。

皇都など旅商人のうわさ話でしか聞いたことのない世界。目の前
にあらわれた石造りの壮麗な宮殿を初めて見たときファナはポカン
と口を開けたまま惚けてしまった。

清潔な着物、豊富に出される食事、なにより日々の労働からの解
放。

宮殿での生活は想像をはるかに越えており、親から売られたこと
などすぐに気にならなくなってしまった。

（あの村で一生を過ごすとはかり思っていたのに、こんな夢みたい
なことが私に訪れるなんて！）

ファナたちに課せられたのは占いの知識を磨くこと。それと同時
に、占いの結果を思い通りに操る技術を身につけること。

修練が続くと伸び悩んだ少女が一人、また一人と宮殿から去っていき、二年後に残ったのはファナ一人だけになってしまった。

それからファナはこの男の望むがまま占い続けている。

「今回の客は訪問の理由が定かではない。それを聞いた後、お前に伝える。しばし控えている」

「かしこまりました」

ファナは面を伏せて眼を閉じた。

イーエンがこのようにファナを呼んで占いをさせる時は必ず公に関わることのあるものだ。個人的な事柄や人の心、抽象的な未来などは歯牙にもかけない。

そのことはこの男にであつたときから直感していた。

（この方は占いなど全然信じてはいないんだ）

ファナはそのことを少し寂しく思う反面、迷信ばかりに頼っていた故郷の村の人々を思いだし、理知的なこの男に仕えられることを誇らしくも感じていた。

「イーエン様。失礼いたします」

気が付くと東屋の外に棒を携えた兵士が二名背筋を伸ばして控えている。

「グラスレイル王国、第一王女。リステリカ・グラスレイル様の御一行がお着きになりました」

そう告げる声にイーエンは軽く頷いた。ファナに軽い目配せをして建物に向かう。

しかし次の言葉はイーエンの歩みを止めた。

「それと、第七皇子ユーアン・エランジウタ様もご同行されております」

「……何だと？」

振り返ったイーエンは眉をひそめ、低い声で呟いた。

「相変わらず、我が弟は意表を突くことばかりしてくれる。来い、ファナ」

不快を滲ませたイーエンの口調に、ファナは慌ててその後ろ姿を

追
っ
た。

潮の都の占い師（後書き）

次回、三つ巴？

兄と弟

隼人はその鼠色の石で出来たアーチを潜って感嘆の息を漏らした。暗い色の外壁からは想像もできない春の色彩を集めた前庭が広がっているのだ。

若々しい黄緑の草に無造作に点在する小さな紅い花。暖かみのある石畳の隙間を埋める黄色の花弁が星形に顔をのぞかせ、小道を歩く人を奥へと誘うように釣り鐘の純白の花が所々に群れている。上を見上げれば天高く伸びた樹が透ける翠の枝葉を広げ、小さな綿をふわふわと舞い振らせる様はまるで春の雪。

マーブル模様の石畳には木漏れ日が踊っている。頬を撫でる風は微かに潮の香りが含まれていた。

隼人たちはその中を天馬を引いて歩いて行く。

「天国ってこんな所をいうんだろうな」

「なに、驚くのはこれからじゃよ」

この宮殿は慣れているのか、前を進むウライは落ち着いた様子でこたえる。

「今のは歓迎の門。ここはまだ宮殿の中とは言えん。あの審問の門を潜って初めて宮殿と言えるな」

ひょいと顎で示した先には四人の兵士が守る鉄の門扉があった。

リステリカが用件を告げ取り取り次ぎを頼む。脇の小さな木の扉を抜けて裾の長い中年の男があらわれて何事か告げる。彼女は懷から金属製の筒をとりだした。

「あれは？」

「グラスレイル王家の盟約の証書じゃ。中に絹の織物が入っておる」
「織物に文字が書いてあるのか？」

「紋章が織られている。エランジェ皇室とグラスレイル王室の融合紋章が。本来ならば事前に訪問の目的を文で御伝えするべきだが、今回は略式じゃ」

中の織物を見聞する男に痺れを切らしたのか、リステリカの前に長身の男が進みでた。

ユーアンは親しげに取り次ぎの男に声をかける。途端、男がかしこまって慌てた様子で奥に消えて言ったかと思うと、直ぐに奥から鉄の扉は兵士によって開かれた。

「天馬が中に入れるのはここまでよ。宮殿の厩にリーヤたちを預けます」

振り向いたリステリカの後ろで褐色の顔が満足げに笑みを作っていた。

通されたのは審問の門を抜け、直ぐ右手の建物。乳白と薄墨色の石が交互に重ねられた柱、そして入り口のアーチ。上品で知的な縞模様はそのまま室内の装飾にも使われていた。

室内に入ると更に細かく分けられた部屋に案内される。通された部屋は一段高く、床一面に淡い白と淡い黒の複雑なデザインが施されている。

左右には細かく区切られ色付けされたガラスが嵌められ、決して広くはない室内に七色のまだらの光を落としていた。

「まったく。よりもよってイーエン兄上の二の宮に通されるとはね」

眼を細めてユーアンはつぶやいた。

正面の台座には厚手の織物が敷かれており、その上に低い椅子と豪華な肘掛けが用意されている。

「あんたの兄弟ってことは王子様なんだろう？仲悪いのか？」

「身内なんてものは何処の世界だって厄介なもんだと思うがな。まあ、お互い様だろうな」

きつと、高貴な身分の方々には隼人には縁の薄いややこしい事情があるのだろう。もちろん隼人の周りにも親族間のいざごさは確かについてまわっていた。

（母親が出て行った時も、親父の家族と揉めてたもんな）

他人事のように思えるのはもう五年も前の話だからだ。隼人の両親は離婚して自分は弟と一緒に父親の家で暮らしている。

父と母の不仲は事前に薄々感じていたので、最後の方は隼人は諦めていたほどだ。この妙に冷めた性格もその経験から来る物なのかもしれない、と自分では思っている。

しばらくすると部屋に長身の黒髪の男と、同じく黒髪のほっそりとした少女が入ってきた。

男は中央の椅子に腰掛ける。少女はその斜め後ろに小さく膝をついて静かに控えた。

対照的な二人である。

男は飾りが少なく白っぽい衣装、髪は絹糸のようにまっすぐで知性を宿した瞳はどこまでも涼しい。どこことなく鷹を連想させる伶俐さを漂わせている。

逆に少女は朱と山吹に染められた布を折り重ねたワンピースに貴石の連なる首飾りが異国風で、豊かな髪は奔放に波打っている。こぼれ落ちそうなほど大きな瞳が小動物のようだ。

どちらの肌も浅黒いが、男は黄みがかった小麦色で、少女は肥沃な大地の色をしていた。

その二人の前に進み出たリステリカは交差させた手のひらを肩に添えて深く頭を足れる。

そのまま口上を述べた。

「古き誓いを元に、新しき言の葉を携えて。グラスレイルから東クロカースへこの娘を遣わす。これ、我等の次なる王となる者なり。」

……久方ぶりでございます。イーエン殿下」

「七年ぶりか。リステリカ・グラスレイル。あの時のそなたはまだほんの子供だった」

「はい。ふたたびお目にかかれて嬉しゅうございます」

頭を下げたまま答える彼女に殿下と呼ばれた男は脇息に肘をかけた。

「私もだ。さあ、そうかしこまることもないだろう。貴国の長年に

わたる友情には感謝している。月日が経つのは早いものだ。そなたがグラスレイル王と共にこの宮殿へやってきたことが昨日のことのようだ」

「あのときは、まだ何も知らぬただの子供でございました。にもかかわらずあのときの殿下のお心遣いには感謝いたしております」

リステリカの声に柔らかさが加わる。

しかしそんな和やかな二人の会話に割って入るものがいた。

「会って早々思ひ出話とは妬けますね、兄上。僕の婚約者がこんな所まで足を運んだ理由を、貴方は薄々分かつているのでしょうか？ 相変わらずお人が悪い」

兄と弟（後書き）

再開。次回、主人公が動く。

交渉の切り札

嬉々とした声はもちろんユーアンのもの。

「父上はお出ましになられないのですか？ 皇都を離れられたとは聞き及んでいませんから、ここに居られるのでしよう。相も変わらずお部屋におこもりか？ それとも神殿に？」

「陛下は病で臥せっておられる。お前こそ城を離れてここで何をしている。帰還命令は下っていないはずだが」

「僕は命令されたから辺境の守備任務に就いたわけではありません。あくまで自分の意志であの地に居を移しただけ。この度はグラスレイルの使者殿を無事にエランジエにご案内したまで。なに、この宮殿に留まるつもりは毛頭ございませんので御心配なく。兄上」

「お前の七の宮は毎日女官たちが床の隅々まで拭き清めて主の帰りを待っていると聞くぞ。丁度良い。リステリカ、愚弟の宮で良ければ滞在中は自由に使われるのが良からう。その方が家臣たちも喜ぶ」
水を向けられリステリカは曖昧に返事をする。

静かに牽制し合う兄弟のどちらにもつくことをためらっているのが手に取るように伝わってきた。

（都の宮殿に住む兄と、辺境の土地で共も連れずに野営をする弟か）
対峙する二人は耳や顎の形がよく似ている。やはり血のつながった兄弟なのだ。

こちらを見下ろすイーエンはおそらく30前後。落ち着き払った態度からは、この弟の挑発的な言動は所詮想定内なのだろう。喰ってかかるユーアンをともに相手をする気はないらしく、そのままリステリカとの話を続ける。

「わざわざそなたがこの都を訪れたのだ。何があったのかは察せよう。翼便からの情報も昨日私の元に届いている。……ギルメの兵がグラスレイルに侵入したとか」

「恐れながら、その翼便は最も重大なことを運んではおりません。

ギルメ兵は我が国の領土を侵したのみならず、グラスレイル王家の男子を……私の弟を、奪っていったのです」

己の胸を痛めるようにしてリステリカは告げるとイーエンは瞠目した。

「盟約により自国ではギルメから王子を奪還するだけの兵を保持しておらず、この度東クロカースのお力を貸していただきたく私が王の名代として参った次第でございます。どうかグラスレイルのため、貴国の兵をお貸しくださいませ」

一息にそこまでいうとリステリカは膝をついて頭を垂れた。ウライたちも倣って平伏するので隼人もあわせる。ユーアンのみが相変わらず兄をまつすぐに見つめていた。

イーエンは頬杖をついていた顔を上げ、手をしっかりと組み合わせる。しばし考え込むような短い沈黙のあと、ゆっくりと口を開いた。

「連合の首長として今のこと、極めて憂慮すべき事態だと認識した。王族の誘拐ともなれば戦を仕掛けるも同じこと。それにそなたの弟といえはまだ十に満たないではないか」

「今年で八つになります」

「直ぐに父上に報告をしよう。詳しいいきさつは後ほど私が直接聞く。それからのち盟約の文言との照会を行うべく法官の元に使いをやることになる」

「兵をお貸しいただけるのですか？」

弾かれたように顔を上げたリステリカにイーエンは厳し顔を向ける。

「まだ私の一存では決められる段階ではない。分かっているとは思うが、我が国とギルメは現在議会による停戦期間が空けていない。本来なら戦になりうる行動はあってはならないはずだ」

「しかし、実際にグラスレイルは侵されました。どんな題目よりもその事実の方が……」

「その事実を認めさせるのは難しい。私とて議会を説得するのは容

易ではない。彼らには明確な利益がなければ積極的に動かないものだ」

隼人は議会という言葉に首をひねった。どうやらこの国はグラスレイルのような専制君主制ではないらしい。皇帝の他に政治的な権力を持つ議会が存在するのだろうか？

リステリカは歯がゆそうに言葉を飲み込む。その肩にユーアンの手がそつと乗せられた。

「兄上。もしその利益とやらが提示できれば議会を説得する自信が
ありますか？」

問われたイーエンは怪訝な表情で弟を見返す。ユーアンはなおも
言い募った。

「グラスレイルはひ弱な童のように単に大国に泣きついている訳では
ありません。かの国の天馬が我が国にとってどれほど重要か。そ
れに彼女等はグラスレイルにとつての至宝を我が国に持参してきま
したよ」

ユーアンの視線が隼人を促した。隼人は小さくうなずくとリステ
リカを同じ所まで進み出て、その側で背筋を伸ばして仁王立った。

物珍しげにイーエンは隼人を観察する。後ろに控えた少女は更に
興味を隠せない様子で珍獣でも見るようにしげしげと隼人を眺めた。
隼人はユーアンに目配せをすると事前の打ち合わせ通りに名乗り
を上げた。

「俺の名前は日下部隼人という。グラスレイルの秘技「宿主」の血
をこの身に宿した異界人だ」

交渉の切り札（後書き）

次回、都の市井にまぎれて。

不慮の予言

「異界：？お前が？」

呟いた声に驚きはない。むしろ軽く呆れた風情ですらある。

「そうは見えないかもしれないが、俺はこの世界の人間じゃない」
値踏みするような視線に隼人は慥然とした。

「極東産の奴隷がお前のような顔つきをしていたな。女奴隷だった故、確かではないが。異界人であるという証拠は？」

「ここにいるリステリカが証人だ。彼女が俺を天馬に乗せてこの世界に連れてきた」

「ほう」

眉を上げたイーエンにリステリカは無言で頷く。

「一国の姫君が異界渡りとは勇ましい。グラスレイルの『宿主』が異界人とは噂には聞いていたが、さてどうしたものか。この少年が異界人であるとして『宿主』である証拠は示せるか」

冷めた問いかけに隼人は反駁した。

「『宿主』は血を流しても瞬く間に傷は癒え、流れたその血は永遠に凝固することはないそうだ。この場で刃物を使わせてもらえればすぐに証明できるぜ。俺の血がギルメが欲しがっている特殊な血だということかな」

その場に緊張が走った。刃物を使わせるとの発言は聞きようによつては武器を振り回させる、と言っているに等しい。皇子の警護兵士の視線が痛いほど注がれている。

しかし当の本人はしばらく眉間に指を這わせたあと明くるい口調で告げた。

「なるほど。お前の言い分には一理ある。だがこの宮殿には祈りの宮もあるのだな、できれば流血は控えてもらいたい。…ファナ！」
控えていた少女が呼ばれてすぐさまイーエンのそばに寄る。

「この娘は私の管轄である八方占術院希代の占師だ。既に国の大事

をあまた占っている。この娘がお前の八方を占い、事の真偽の証明とする」

少女は小首をかしげるように振り向くと、顎を引いて隼人を見据えた。

（こんな小娘に俺を占わせるって、マジか？）

ファナと呼ばれた少女は控えていた段から降りると石の床の上に自分の肩に羽織っていた幅広のショールを広げる。正方形をしたそれには唐草のような曲線のと正確な直線で構成された刺繍が施されていた。

当惑した隼人は周りの人間に助けを求めるように顔を窺う。眉根を寄せて、それでも事の次第を見守るのはウライ老師。ユーアンは少女の作法をじっと見つめる。

どうやらこういった場面で占い師が出てくるというのは珍しいことではないらしい。近代合理主義の洗礼を受けている隼人にとって、国同士の話し合いのさなか占いを判断材料にするなど信じがたいことだ。

古めかしい習慣にはグラスレイルで慣れたつもりではいたが、隼人にとってこの事態は予想だにしていなかった。

ユーアンに出会ったあの日から隼人たち一行はいかに皇国を動かせるか何度も話し合いをした。そしてその必要性をもっとも強調したのは皇族であるユーアンだったのだ。

『エランジェの一族は容易に他者に情けはかけない。自ずと駆け引きが必要になってくる。隼人、お前の価値を効果的に分からせてやらなければ皇都に赴く意味がない』

彼の言葉は正にその通りだったのだけれど、この占い師のことは考慮されていなかった。

こうなってしまうては隼人にはどうすることも出来ない。

四隅まで綺麗に広げられた布は眼にも鮮やかな緋色。金の刺繍は大きな八角形を描いている。

「こちらへ」

小鳥のさえずりのような声は褐色の少女のもの。促されるまま隼人は少女と布を挟んで向かい合う形で座り込んだ。

振り返ると白い顔をしたリステリカと目が合った。

思い通りに事が運ばずさぞ厳しい表情をしているに違いない。今までの経験上の隼人の思い込みは、しかしこのときばかりは間違이었다。

誇り高い姫は唇が白くなるほど引き結び、不安そうに顔を歪めている。今にも泣き出しそうな便りなさげな様子。

隼人は思わず口を開きかけ、そしてかわりに深く頷く。

いまの隼人にはそれだけしか出来なかった。何の効果もないかもしれないが、ここで自分がうるたえるべきではない。

僅かなアイコンタクトでしかなかったが、リステリカはそれだけで何かが伝わったようだ。彼女も本の僅かに頷いたような気がした。「手を出して」

占い師が差し出した隼人の手に首飾りを掛けようとしたとき。唐突に玉を連ねていた糸が切れた。拘束を失った色とりどりの飾り石が床にこぼれ、瞬く間に布の上に撒き散らされていく。

少女が声なき声をあげて立ち上がった。口元に手を当ててあらんばかりに眼を見開いて刺繍の上に飛び散った石を凝視している。

「……そんな」

漏れた声は震えている。信じられないものを見ているかのようだ。「ファナ。かまわぬ、申してみよ」

イーエンに促されてファナは己の腕を抱きしめながら告げた。

「翡翠、一の方位。珊瑚、七の方位。紫水晶、十三の方位。残、天地の淵。……この御仁は聖八花の守護をも脅かす国家千年の憂いの凶象にございます」

不慮の予言（後書き）

次回こそ、外に。

船の行き交う街

エランジェはトラペス海の北方、その外洋に繋がる海峡の対岸を跨がるように広がる古くからの港町である。穏やかな三つの湾を抱え、その海路はこの都に多大なる富をもたらした。

海峡を行き交う船には代々この街を治めた国が税をかけるので自ずと交易の要所となる。

特にトラペス海の海岸沿いには湿った風と海に注ぎ込む川の灌漑水を利用しての香桃が盛んに生産された。その果実は豊潤で果汁を多く含み、硬い外殻が運搬に適していたためこの地方の特産として積極的に輸出されている。乾いたこの土地での貴重な水分として人々にとっては欠くことの出来ない果実でもある。またその花の蜜は栄養価に富み雑味のない味わいは極上の蜂蜜として他国で重用された。

エランジェにはこれらの荷を積んだ船があまた行き交い、ゆえにこの海峡は甘露海峡と称される。もちろんそれらはそのまま東クロカースの国力を示す物でもあった。

リステリカは窓の外に広がるエランジェの街の灯りをひとり食い入るようにみつめた。

昼間の出来事は思いがけない事故だったのだと後になって思う。

玉占いは八角陣の上に玉を零してその飛散を読み取る占術である。特に八方占術は方位と数字を組み合わせ高度な理論と歴史を持つ古代クロカース時代より続く由緒ある占術体系。国家でもその占いの結果は重視され、優れた占い師は国立の占術院により保護され育成される。

自分と同じ年くらいに見えた少女がその地位にあるとは正直驚いた。ましてやあれほどの結果を告げるとは。

あのあとすっかり怯えてしまった少女を下がらせると、イーエンはリステリカ一行にしばらくの期間は宮殿に留まるように告げた。

もちろん隼人がその筆頭である。異界人であるという以前に、国家に害なす凶象とすればむやみに都での自由を認めるわけにはいかない。それがイーエンの言い分だった。

結局、その場ではグラスレイルへの兵の貸与について決着はつかずじまい。明日からまた説得と交渉が続く。

眼下には青い闇に街の建物の黒い影がくつきりと浮かび上がっている。まだ時刻は宵の口。人々の家に火が灯って厨の煙突から細い煙が海風に吹かれながら立ち上る。見渡す限りの民家にはみな人が住んでいる、その光景に山奥で生まれ育ったりステリカはしばらく想像をたくましくした。

何万、いや何十万の民がこの建物のひしめき合った街で寝起きを繰り返して生活を営んでいる。

水面に映り込んだ光は船につり下げられたランプの物だろうか。夜を迎え昼とは違った喧噪に包まれる街は不思議に魅力的だ。

その中のいくつか、街の中に黒い塊として横たわる石造りの建築物に眼がとまる。

（グラスレイルの城より大きな建物。あれも商人の邸宅なのかしら）
ユースに聞いた所、この街でもっとも力を持っているのは聖職者、その次に商人なのだという。エランジェの中でも三階建て以上の住居を構える豪商は枚挙にいとまがない。互いに商売上の徒党を組んでは効率よく利益を上げその組織は政治的な発言権さえ持っていると言う。

一度この都を訪れたときはまだ子供で、宮殿の中庭で遊んだ記憶ばかり。咲き乱れる美しい花々と一緒に遊んでくれた皇族の子供たちはリステリカにとって懐かしく微笑ましい思い出だ。

しかしこうして眺める市街地に降りたことは一度もなかった。

きつと今頃ユースは街に降りて人々に混じって都の喧噪の中を身軽に泳いでいるのだろう。彼は自分の身分を隠して民と交わることを長年の習慣としている。それは都にいたときも今の辺境に赴任をしてかららしい。

彼が他の皇族とは違つて批判的な意見を軽々しく口にするのはそうした中で育まれた彼なりの見識があつてのこと。元々が扱いにくいと評判の第七皇子、彼は宮殿での皇子教育という物を上の空で聞いていたに違いない。

ふと視線を海側の庭に落としたときだった。

見覚えのある後ろ姿が薄やみにまぎれるように庭を移動したかとおもつと、一番石垣に近い枝を広げた樹に登りはじめたのである。

黒い短髪に特徴的な顔つき。見間違えるはずもなくそれは異界の人間、隼人だった。

（何をしているの！あの男は！）

リステリカはほとんど身を乗り出して隼人の一連の動きを眼で追跡する。どうやら塀を乗り越えて宮殿の外への脱出を計っているらしい。

たどたどしくも樹を昇りきると辺りをしきりに見回し、そのまま宮殿と下界を隔てる塀の上に飛び乗って瞬く間にその姿を向こう側に消してしまった。

リステリカは青ざめた。

ここまで来たからと油断していた。まさか右も左も分からない都以て異界人が逃亡を図る何て。

イーエンに対して人質としての価値を持っているから、と自ら名乗り出たとき驚くと同時にひとかに隼人への認識を改めたのだ。軟弱な異界の男から弟を救う為に力を貸してくれる少年へと。

怒りなのか悔しさなのか、自分でも分からない。しかし一つだけはつきりしていることがある。

（連れ戻さなければ、あの馬鹿男を！）

「宿主」という切り札がなければ今後自分たちは交渉のテーブルにつくことが出来ない。

決めてしまえばリステリカの行動は早い。あつという間に庭まで降りると隼人と全く同じ方法でいともあっけなく宮殿の外にでてしまふ。

隼人は頭は悪くない。 a 人が隠れるならば人の中だと考えるはずである。

リステリカは迷うことなく街の中心に向けて駆け出した。

船の行き交う街（後書き）

次回、都めぐり。

灯り宵

「さあさ、エランジエーの魚料理はいかがかね？」

「お嬢さん、今夜の宿はお決まりかい？ 今なら一等の部屋が空いてる。安くしとくよ！」

「銀細工の耳飾りはどうだい？ 娘さんの金髪によくお似合いだ」

生暖かい人の群れをかき分けてめまぐるしい喧噪にリステリカは息が詰まりそうだ。

道ばたでは手作りの装身具を客に披露する行商人、食堂付きの宿では若い青年が通りに出て店の味自慢をしている。傍らでは旅芸人が猫の回し芸を披露し、酔った見物人が気前良く投げ銭をよこしている。驚いたことに店の中では若い娘も友人たちと食卓を囲んで笑い話に興じているではないか。グラスレイルではまったく考えられない。

建物は延々と立ち並び、その底を蛇行しながら連なる丸い玻璃灯。何処までいっても無数にざわめく人の波。人、人、人。

（こんなにたくさんの人を養うことが出来る街なんて。だいいち夜になってもこんなにたくさんの人が家の外に出ている。店が開いているからだわ）

その店先にも複数の蠟燭を美しく配置した燭台柱が飾られていた。それらが夜の闇を払って人々の顔を明る照らし出し街を浮かび上がらせている。光を溢れさせることが出来るのも、大量の蜜蠟が安価で手に入るからに他ならない。それは都人だけがもちうる贅沢でもある。

時刻が時刻だけに食べ物を提供する店が活気がある。先ほどからもしきりに香辛料につけた羊を炙る香ばしい匂いや、露天で果物を切り分ける水っぱい香りが彼女の胃袋を刺激していた。

もちろん持ち合わせなど持ってきていないしそんな暇もない。自分は今人を探すためにこの場所に來たのだ。

異国人の多いエランジェの街といえども隼人の起伏に乏しい容貌はかなり特殊だ。人に訊ねて歩けばきつと見つかるだろう。

リステリカが探す方向の当てをつけるため分かれ道で立ち止まったときだった。

「あの、落ちましたよ」

柔らかな声が背後からしてリステリカは驚いて振り向いた。

そこに立っていたのは背の高い見知らぬ顔の青年。ずっと手を差し出すと遠慮がちに微笑んだ。

「さっきの店の前を通ったときに落としてましたよ。これ」

そういつて青年は鼻の頭に皺を寄せるようにしてはにかんだ。

受け取ったそれは小さな釦。服のどこから取れてしまったのだろうか。全く記憶はないが、だからといって自分の物でもないという記憶もない。

「ありがとう。ご親切に……」

「よかった。違ってたらどうしようかと思ったんだ」

「え？」

くだけた調子になるリステリカに青年は眼を細めた。

「だって、その君の気を引くために声かけたって思われるのも嫌だし。でも確かに君の服から落ちた物だったから。渡せて良かった」

リステリカはクスリと笑った。

「そんなこと、思わないわ」

「君が思わなくても、俺の仲間が思うんだよ。君、凄く綺麗だからちよつと目立ってたんだ」

思わず眼を見開いた。面と向かってそんなことを言われたのは初めてだ。姫として礼節に適った賛辞は受け慣れているけれど、こうして普通に女性として容姿を褒められたことなど今まで一度もない。リステリカは視線をそらして何度か瞬きすると、妙に明るい声で青年に話しかけた。

「それよりも、奇妙な男を見なかったかしら？」

「奇妙な男？」

「奇妙っていうか、珍しい民族なのよ。短髪の黒髪で黒い眼をしてる黄色い肌をした17、8歳くらいの男。顔立ちが平べったくって凄く変な感じなの」

リステリカが早口でまくしたてると青年は、もしかして、呟いた。
「知ってるの？」

「多分、俺の友だちが見かけた奴じゃないかな。黒髪黒眼の男」

「何処にいたのか教えてくれない？」

「俺が直接見た訳じゃないから。良ければその友だちから直接聞けばいい。会わせてあげるよ」

気安く請け負って青年はリステリカに笑みを向ける。

「こつち」

返事を待たずに青年は足早に歩き出した。

（すこし怪しいけれど、迷って無駄に歩き回るよりはマシだね。
いざとなったら……）

腰に携帯している小刀にそつと触れるとリステリカは一拍置いて青年の背を追った。

灯り宵（後書き）

次回、ピンチに。

造作ない悪意

「ねえ、あとどれくらいなの？」

「すぐそこだよ」

前に行く青年は気楽に答える。

先ほどの大通りの端まで案内されると更に脇道に入る。灯りの漏れる通りを背後にリステリカの足下には自分自身の影が薄く伸びていた。

人々のざわめきから遠のくにつれて夜はいよいよ濃い。

「歩かせちゃって悪いね。でもいい奴だから安心しな」

しきりに振り向きながら声をかけてくるので会話が途切れることはない。

しかし両脇に迫る建物に圧迫感を感じる。ここで何かあれば左右には逃げることは不可能だ。

煙草と酒の匂いだろうか、淀んだ空氣に混じって微かな異臭が鼻をかすめる。壁の向こうから聞こえる人の声。宿屋の裏手らしく小汚い残飯置き場から眼をそらして先に進んだ。

「本当にこの先？ なんだか人がいそうじゃないわ」

「大丈夫だよ」

振り返らずに先ほどと同じ調子で返答する青年。

進めば進むほど人氣のない細道に入り込んでいるのに不穩なものを感じてリステリカはのろのろと歩みを緩めた。

明らかにおかしい。

「お友達はどこにいるの？ 私、これ以上は……」

唾を飲み込んでその場で立ち止まると青年はおもむろに振り返る。満面の笑みだった。

「ああ？ 友人なら、ほら。君の後ろに」

顎で示されてリステリカは素早く振り返った。

建物の裏口から若い男が三人。一様に姿勢が悪く薄ら笑いを浮か

べている。

引き返そうとしたリステリカの前を男たちは無言で塞いだ。

「どきなさい」

一番背の高い男をリステリカは睨みつける。後ろで案内をしてきた青年が口笛を吹いた。

「見かけによらず気が強いんだ。いいな」

「嘘をついたのね」

「黒髪黒目の男なんてこの街には掃いて捨てるほどいる。もちろん毎日見かけてるさ。なあ？」

青年が仲間に一声かけると一斉に卑下た笑いがおきた。

「戻ります。こんなことしてる暇はないの。ここを退きなさい」

「もちろん戻してやる。明日の朝になあ。それまでちよつと楽しく過ごそうぜ」

そういつて男の一人がその金色の髪に触れる瞬間、リステリカの右手が閃いた。

鋭い白刃が空を切り、伸ばした男の手のひらに赤い筋が走る。

「この女、武器を持つてるぞ！」

男たちが一気に殺気立つのが手に取るように分かった。しかしここで引くわけにはいかない。

これは自分の不注意が招いた危機。都人はみな豊かで幸せな生活を営んでいると常々聞かされていたから、なんとなく皆良い人たちなのだとは無意識に思っていたのかもしれない。

あるいは初めての夜の街の雰囲気にすっかりのぼせていたからかもしれない。

リステリカは悔しさに唇を噛んだ。

囲んでいるのは四人。あまり体術には自信がないが護身の稽古は受けている。

腰を屈めて相手の脇をかいくぐろうと小刀を素早く突き出した。しかし次の瞬間リステリカは物凄い力で手首を掴まれあつという間に地面に引き倒される。

力任せに握られ手首の腱が圧迫されると短い悲鳴とともに手から小刀が落ちた。

「もうおしまいか？もっと楽しませてくれよ。つまらないじゃないか」

力の差は圧倒的でリステリカは男相手に切り抜けられるという自分の過信を認めざるをえない。

青年が髪を引っ張って無理矢理顔を上げさせるが、リステリカは力の限り顔を背けた。

なんて汚らわしい男。自分が相手より圧倒的に優位だと誇示することに酔った男。

あまりの屈辱に歯を食いしばってもうつすら涙がにじんできたのが分かった。

泣きたくななどない。絶対に屈しない。

「まったく。まだ状況が分かってないらしい。おい、この田舎娘に分からせやれよ」

一人の男が引き倒され仰向けになったリステリカの服に手をのばした。その時。

「その女から離れろ」

造作ない悪意（後書き）

次回、新キャラ？

危機を救う者

隼人は完全に道に迷っていた。

通りがかりの人々を片っ端から捕まえて目的の店の名を告げるが、一人として同じ方向を示した者がいない。知らないなら知らないと言えればいいものを、酷いと知らぬ間にいかかわしい店に引き込まれそうになる。

（まったく、都に出てきたばかりのお上りさんだと思ってからかつてやがる）

昼までは見かけなかったいかにもガラの悪そうな連中が飲食店の脇にたむろしているのを見て隼人は舌打ちをした。

確かにこちらの世界のことに不慣れだ。しかし隼人は夜の歓楽街に戸惑っている訳ではない。この享樂的でありながらエネルギーを内包する人々が集まる雰囲気は馴染みのあるものだった。

両親の離婚のち隼人は夜の外出が習慣になった。何度か不良に絡まれたり警察に補導されそうになったこともある。特に悪さをする訳でもなかったが、家での居場所を見いだせなかった隼人はそのまま目的もなく放課後の時間をネオンの元で過ごす日々が続いた。

一時期、少々危ないアルバイトに手を染めたこともあったのだが、隼人の知らない所で弟のところとうさんくさい連中が顔を出したと聞いて直ぐに足を洗った。

それ以来、夜の街からは一歩ひくようになっていた。

一見何気なくみえる華やかな街の姿。しかしこの街にも何かを持て余した若者がくすぶっているのが眼の端に止まる。彼らを相手に商売をする大人たち。そして女たち。

日が落ちてから宮殿の外で、とユーアンは言った。別れ際に店の簡単な位置と名前を伝え、宮殿の外に出る方法を教えると、香草酒が美味いんだ、と付け加えた。

別に酒に釣られた訳ではなく、そのときに意味深なユーアンの表

情から何かしらの匂いを感じ取ったのだ。

昼間の占いが気にならないと言えは嘘になる。たとえ迷信だと思っ
ていてもあの占い師の少女の取り乱しよつはこちらの心構えも乱
されようと言うもの。

肝心の話も決着がつかずじまいで、リステリカは傍目から見ても
納得がいていないのがあからさまだった。

（せめて文字が読めればな）

そうすればいちいち人に訊ねずとも通りの看板を読むことが出来
るし、必要とあれば書物を読んでこの世界について学ぶことも出来
る。いつまでもリステリカやウライに頼ってばかりではそれこそ本
当のお上りさんではないか。

今一度気を取り直してユーアンのいる店を探しはじめたときだっ
た。

隼人の視界の端をかすめたのは人の頭の群れの中に見覚えのある
飾り帽子。背の低いそれはすぐに人の間に隠れてしまったが、あの
身長とこぼれた金髪では見間違えようがない。

どうしてこんな場所に。第一、どうやって宮殿を抜け出してきた
のか。

声をかけようと口を開いた隼人の脇を、その帽子を追うように三
人の男たちが早歩きですり抜けていく。

向かっているのは通りの端の方、歓楽街の中でも食べ物屋より男
たちがたむろす遊技場や艶かしい女たちが客を引くような裏通りに
繋がる。

隼人は考える間もなくその男たちを追って駆け出すと、細い路地
に吸い込まれていくリステリカを見つけた。

（あの馬鹿女。何やってるんだ！）

路地を進む隼人の耳に甲高い女の声が届く。その声に弾かれて全
力で追いつくと、眼の前にあらわれたのは男たちに地面に押さえ込
まれた金髪の少女の姿。

その光景に一瞬で頭に血が上った。

「その女から離れる！」

怒鳴りながら隼人はリステリカに跨がっていた男に体当たりをすると続けざまにもう一人の頬を殴りつけた。

その勢いのまま倒れ込んでいたリステリカを引きずり起こす。細い肩を突き飛ばして自分の後方に押し込める。

「おい、お前この女のなんなんだよ？邪魔してくれるなよ、いいとこなんだからさ」

一番奥にいた優男が隼人に近づきながら笑った。しかしその眼は隼人を切り裂くほど凶暴だ。

最初に隼人が殴ったふたりも全身に怒気を滲ませて立ち上がり今度はじりじりと隼人を取り囲み始める。

隼人は額に悪い汗が浮かんでくるのを感じた。相手は四人。しかも一人は小さいナイフのようなものを持っている。

（おいおい、冗談だろう）

相手は隙をうかがっていたかと思うと、突然刃物を振りかざして襲いかかってきた。

しかし、予想とは違いその手がおろされることはなかった。

代わりに軽い破裂音とともに火薬の匂いが当たりに立ちこめ、男は肩を押さえて激しくうめき倒れ込む。

引き続き二回目の破裂音。

もう一人はガクンと膝をついたかとおもつとその太もものズボンがみるみる赤く染まっていた。

振り返ると、そこには緑の眼をした一人の女が銃を構えて立っていた。

危機を救う者（後書き）

次回、宮殿の人々？

影なる皇女

宮廷には魔物が棲むという。

親しき人の顔をした魔物。美しき女の顔をした魔物。忠実なる家臣の顔をした魔物。そのどれもがイーエンには覚えがある。幼い頃からよく見知った魔物たちの顔だ。

どんな人間も所詮はこの宮廷の権力の盤上の上の駒でしかない。己の欲望と願望を叶えるための力を欲してここに引きつけられている。

ー本当に危険なのです！イーエン様！

耳には昼間のファナの滑稽なほど動揺した泣き声が残っていた。

意図せずに八方陣に巻撒かれた玉の相を読み取った占い師の少女はあらんばかりに目を見開いて異界の少年の災厄を自分に訴えてきた。

占いは本当ならばイーエンが采配を古い、こちらに有利な結果をファナが巧みに操る手はず。それが緒が切れるという事故のおかげでより劇的に演出できたくらだ。

予想以上の成果をもたらしたファナにかけた労いの言葉をあの少女は身を震わせて拒絶したのだ。

（国家占術師といっても所詮は政に疎い東方民族の小娘。手なずけるのも骨が折れる）

小さく息を漏らしてイーエンはほの明るく照らされた扉の前に立った。

猫眼石をはめ込んだアーチには蔓の渦巻く様が彫られ、その鉄製の扉を妖艶に彩っている。

「私だ。開けよ」

告げると直ぐに内側から扉が開かれ、中から顔を半分隠した女が恭しく頭を下げる。イーエンが目の前を通り過ぎると素早くその扉は閉められた。

花模様の鉄格子を潜りぬける。それはこの国を象徴する八枚の花弁を持つ聖なる花。

幾重にも重ねられた花々の最奥にその人物はいた。

光沢のある深紅の絹織物の上で一輪の花のように背筋を伸ばし座っている。

ランプの灯りを映す透き通るような長い黒髪。薄い唇に秀でた額、涼しげな目元は僅かに開かれている。

そのまどろむような瞳が焦点を結ぶことはない。

イーエンは目の前の女性の前にひざまずくと頬にそつと手を添え羽毛のような声で囁いた。

「お痩せになられたか？」

仄かな液体を宿す瞳がうつろにイーエンを捉える。

「ええ。少しだけ」

女性はイーエンの手のひらにすり寄るように頭を傾けると心地良さげに眼を閉じた。

「でも最近は調子が良いの。ずっと起きていられるわ」

「無理はなさらないでください。まだ夜は冷えます」

「ここには夜も昼もない。知っているでしょう？」

黒髪の女はそういつてイーエンの頬にも己の手をあてた。

それはまるで鏡合わせの像。

イーエンの首に金環があるのと同様に、女のほっそりとした首にも金の首輪が嵌められていた。

女の眼が盲でなければ二人はまったく同じ人間といってもよかった。

「貴女の瞳に陽光は毒です。今しばらくはここに」

「お前もお父様と同じことを言うのね」

「姉上」

「いいえ、分かっています。貴方はいい子よ。イーエン」

姉と呼ばれた黒髪の女は妖艶に微笑んだ。

第二皇子の双子の姉姫。

生まれたときから共にあるイーエンの影。

父王から与えられたのはこの光の届かない牢獄と、その名前のみ。
東クロカース第一皇女、ラーヒユラ。

それは、破戒と虚無を司る禁忌の女神の名である。

影なる皇女（後書き）

さて、街の方では……。

七番目の息子

「勘違いしてもらっちゃ困るのはあたしは善意の人助けなんかには興味はないのね。なに、別に穫って食おうってんじゃない。」

要するにこのことは憲兵には黙って欲しいってことと、ちよつと宮中について聞きたいことがあるのさ。あんたグラスレイルの姫様だろう？」

よく通る早口でまくしたてると女は木の葉の色の瞳でリステリカを覗き込む。

「どうして、それを」

「おい！」

隼人は鋭くりステリカをたしなめる。うっかりと口を滑らせた彼女は慌てて口を押さえた。

そのやり取りに満足げにくつくつと笑った女は豪快に香草酒を煽った。

「はあ！この一杯の為にエランジエに寄ったようなものねえ！」

赤毛の女は陽気な声で隣に座る巨軀の男の肩を叩く。

鍛え上げられたあでやかな肢体に露出の多い衣装を粋に着こなす女に対し、黒髪に若白髪まじりの男は飾り気のない地味な色の旅装束だ。

「そんなのはお前だけだ」

「なにさ、酒もロクに飲まない男なんざ連れて歩いてても面白くも何ともない」

「お前をおもしろがらせるためにいるんじゃない」

「あー！鬱陶しいったらありゃしない。辛気くさい男は用なしさ。ねえ？」

強引に同意を求められたリステリカはあつけにとられて眼を丸くしている。

「あたしの名前はウルネ・ハコラ。でこっちのむさ苦しいのがヘイ

リキ・クーン。あたしたちは真珠座っていう移動劇団の一座であたしが座長。もちろん役者もやるよ。

あんなたちのことは芸人仲間ではもう伝わってる。天馬を連れて宮殿を訊ねたグラスレイルの金髪金目の王女」

ウルネと名乗った女は一息にそういうとリステリカをまじまじと見つめた。

「それにしても噂以上だね。ほんとに眼の覚めるような美少女じゃないか！それにキミ、何処の国の生まれかは知らないけど、細い目も低い鼻も独創的で凄くいい！どう？二人ともうちの役者になる気ない？」

「なんでそうなるんですか！」

「ウルネ。お前は余計な話が多過ぎる。さっさと本題に入れ」
冷たい声で促したのはヘイリキという無愛想な顔をした男。

ウルネはヘイリキをねめつけると隼人とリステリカに向かって身を乗り出した。

「聞きたいことっていうのは第七皇子のことだよ。あの皇子様がいま宮殿にいるっていうのは本当なの？」

ひたと眼を見つめてウルネは声を低くした。獲物を狙う狩人のようだと隼人は身を硬くする。

「ね、どうなの？」

「そんなこと宮殿に自分で聞けばいいでしょう」

戸惑って言葉に詰まったりリステリカを見て取って隼人が反論すると、ウルネは片方の眉を吊り上げて皮肉めいた口調で告げる。

「あんな第七皇子のこと、何も知らないみたいだね。あの人のことはね宮中では話題にしない、そういうことになってる。もちろん世間の眼にさらされることもない。存在はするけどその存在に触れることはない。七番目の皇子は裏切りの息子だから」

「ユーアンが裏切りの息子？」

「別にあの人が何かした訳じゃないさ。エランジェ皇室では代々七番目の皇子は裏切りの性を持つと言われ遠ざけられる。」

エランジウタの古い伝承に八人の息子が登場するんだけど、その中で七番目の息子が父を裏切り、八番目の息子が父を皇位に導いたとなっている。だから伝統的に末息子である第八皇子が皇帝になるんだよ」

驚いてリステリカを見ると彼女はつまらなそうに視線をそらした。婚約者であるユーアンにまつわるこの話をリステリカが知らないはずがない。

グラスレイルとエランジエ皇室との力関係は隼人の思っているより平和的なものではないのだろう。昼間のイーエンとの謁見の際に感じた兄弟の確執。そして属国ともいえる小国の姫との婚約。

飄々と気軽な皇子が宮殿の拘束を嫌って辺境を放浪しているとばかり思っていたのだが、どうやら事情はもつと複雑らしい。

「で、どうなんだい？あの人はいま都にいるの？」

「いたとしたらどうすんだ？」

「もちろん、会うのさ。できればあんたたちに街に呼び出されて欲しいくらいだよ。あたし達は芸人と言っても宮殿に上がるほど上等な一座じゃないからね」

そういつてウルネが酒の杯に口を付けた時。

「麗しの婚約者殿にそんな手間はかけさせられないな」

七番目の息子（後書き）

次回、この人たちの狙いは？

黒い鉄

その人は精悍な顔を引っさげて、何事もなかったかのように隼人たちの机の前に立っていた。

「宮殿からここまで迷ったんだろう？隼人。リステリカまで連れてきて、夜の街は危険だと思わなかったのか？」

ユーアンは若干刺を含んだ質問を上げかけると隼人が答える前に隣のテーブルから空いた椅子を勝手に引き寄せて腰を下ろした。

「まあ、いい。こうして目的の人物たちに会えたんだ。元気そうだな、ウルネ」

「まったく、あんたって人は身一つで何処にでもいつちまう。おかげであたし等は居所を掴むのが一苦労だよ。ああ、逢えて嬉しい。これは本当だよ」

そこまでいうと二人はにやりと視線を交わしてしっかりと握手をした。

「二人は知り合いなのか？」

何を今更、といった表情でユーアンが机に肘をつく。見計らったように隼人たちの目の前に皮から油の滴る肉の串焼きと山盛りの胡麻パンが並べられ、勢揃いした所でみんなの手が一斉にそれらに伸ばされた。

ひとしきり腹が満たされた所でウルネはユーアンに語り出した。

「この子たちがチンピラ連中に絡まれてるのを助けてやったのね。

ほら、あたしって根っからの善人じゃない？それに一例の物も試しに使ってみたかったし」

「試し？使ったのか？」

「ああ、大丈夫。一発だけだよ。予想以上だったね。さすがサンルチンの技術は抜きん出てる」
「見せてみる」

言われてウルネは、はいよ、と無造作に机の上に先ほど不良を撃った銃を取り出した。

密度の高い黒鉄のかたまり。銃身にあたる部分は拳銃より長く磨きの粗いそれは鈍く光り、グリップは滑らかな曲線に削られた木で出来ている。

「加工の技術が良いと言うよりもこれは弾の方が問題だ。針を刺して火薬に着火するからくりらしい。

あたしには詳しいことはサッパリだけど、着火も安定しているし、何より火薬がいい。威力があるしね」

「イフトの塩のおかげだな。火薬を作るのにはあれの調達はどの国も頭痛のタネだ」

慣れた手つきでその鉄のかたまりと弾丸を受け取ると、ユーアンはさっさと懐のうちにしまう。

酒場の喧噪にまぎれて誰も気が付かないが、明らかにこれは武器の受け渡し。

実物を見たことがない隼人といえどもぎょつとしてつい口を挟んだ。

「今の銃だよな」

その言葉と同時にユーアンとウルネが隼人を振り返った。

「おまえ、これが銃だと分かるのか？ 異世界にも銃があるのか？」

思い切り隼人に食い付いたのはユーアンだ。今までで一番真剣な表情で矢継ぎ早に質問する。

「いや。あることはあるけど。俺は本物は見たことも触ったこともない。普通の日本人は一生縁のない物なんだ。

……ていうか、こっちの世界に銃があることの方が驚きだな」

迫るユーアンに隼人は慌てていい訳をする。すると心底残念そうな表情でユーアンは首を振った。

ありがたいことに、その様子を面白そうに見ていたウルネが隼人に説明を始めた。

「好事家の間でしか出回っていないただの玩具みたいなものさ。基

本的には音を出して害獣を追い払うものだけど最近は武器として一部の国が使い出してる。

そう、ギルメとかがね。あの国は戦争が大好きなんだから仕方ない」
うんざりした様子でウルネが肩をすくめる。

その帝国の名前に隣で大人しくしていたリステリカが強いまなざしを向けた。

「この銃を作ったサンルチンもギルメに侵略された小国の一つだ。下手に製鉄技術があるとあの様だ。哀れなものだな」

不快そうに眉を寄せたユーアンは大きく香草酒を煽った。

「この国では使ってないってことなのか？」

素朴な疑問を感じて隼人は首を訊ねる。

「作る技術はあるはずだがこの国はそういうことには疎くてな。だが俺は違う」

真剣そのもののまなざしでユーアンは語る。怖い皇子様だねえ、とわざとらしくウルネが皮肉った。

「……ギルメはその武器を私の国でも使ったわ」

ぼつりと呟かれた言葉は、しかし硬い感情に覆われていた。

あのととき、確かにグラスレイルの城の中で火薬の匂いを嗅いだ。

そして王の傷はあれは銃創ではなかったか？

山奥にある小国が火器を持った兵士に襲われればあらがうすべはない。クルイルの誘拐だけですんだことの方がむしろ幸運だったようにすら思えてくる。

奥歯を噛み締めたリステリカにユーアンは静かな声で告げた。

「このままギルメの横行を許せば、君の国もサンルチンの二の舞になるかもしれない。なぜならグラスレイルには……天馬がいるのだから」

黒い鉄（後書き）

次回、敵方？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1055r/>

蒼天のリステリカ

2011年6月16日23時40分発行